

# 乳幼児の保護者の ライフキャリアと子育てに関する 調査報告書



本調査は、少子化や共働き世帯の増加などの社会環境の変化の中で、乳幼児をもつ保護者がライフキャリアをどのようにとらえているか、また子育てやキャリアの悩み、妊娠・出産・子育てへの支援ニーズの実態把握を目的として実施しました。子育てや保育に関わる方々のみならず、広く社会全体で子どもやその家族へのより良い支援のあり方を考えるための情報としてご活用いただきたく、調査結果をご報告します。

調査の目的と意義・調査概要	2-5ページ
パート1. 保護者の生活	6-14ページ
パート2. 保護者の価値観・意識	15-23ページ
パート3. 子育てサポート	24-28ページ
調査からみえてきたこと	29-31ページ

## 調査の目的と意義

国内における共働き世帯は年々増加している。内閣府の男女共同参画白書（令和5年版）によると2022年時点での共働き世帯は1,191万世帯で、1985年の718万世帯からは約1.7倍、専業主婦世帯と比べると3倍近い世帯数になっている。また、国立社会保障・人口問題研究所（2022）が独身者を対象に行った調査によれば、「女性のライフコースの理想像」は、男女ともに「結婚し、子どもを持つが、仕事も続ける」という「両立」コースが第1位となり、長らく第1位だった、結婚または出産を機に退職し子育て後に再び仕事を持つという「再就職」コースを上回った。

このような大きな社会変化は人々の意識や価値観とどのように関連しているのか。人はそれぞれライフステージ（時間軸）によってライフロール（役割）を変化させていくが（Super, 1980）、子育てと仕事の「両立」コースが主流になっているということは、女性においては「親」や「家庭人（家事や配偶者としての役割等）」とともに「職業人」役割も担う人が増えていると考えられる。また、ベネッセ教育総合研究所の調査（2021）において乳幼児をもつ母親にたずねたところ、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と回答する母親が7年前より約1割増えて6割となった。ここでいう「自分の生き方」には、仕事に限らず趣味など自分の時間を大切にしたいということも含まれよう。日本は従来から母親の親役割を重視する傾向があると言われてきたが、親役割以外の役割も大切にしたいと考える母親が増えてきているようである。そして、このような社会や母親の価値観の変化は父親の価値観や行動とも相互に影響しあうものであろう。

急速なライフスタイルの変化はさまざまな問題を引き起こしている。特に、働く母親の増加に伴う待機児童問題や保育士不足により、地域によっては受け入れが困難な状況も生じている。また、育児と仕事の両立が難しく、特に女性が仕事と家庭の両方を追求することに困難を感じている。さらに、育児における負担やストレスによる産後うつや育児うつといった心の健康の問題も深刻である。父親に対しては育児休業制度の法制化など、環境の整備は進んでいるが、職場による理解の差はまだ解決の途上にある。子育てに関わる問題は山積しており、社会全体での取り組みが不可欠と言えよう。

以上のようにまだまだ子育て環境が整ったとはいえない社会の中で、子育て世代が何を考え、何に悩んでいるかをとらえることで、社会はどのような対応が求められるのかを本調査では明らかにしたいと考えた。

パート1では、「ライフ・キャリア・レインボー」の理論（Super, 1980）を参考に、子育て世代の主なライフロールとして「親」「家庭人」「職業人」「個人」の4つを取り上げ、各役割についての理想と現実、キャリアに関する悩み等を調査した。結果は、母親は自らの理想以上に親や家庭人役割に多く従事し、父親は職業人役割に多く従事している現実がうかがわれ、特に正規職で働く母親の多重役割による悩みが大きいことがわかった。

パート2では、キャリアの選択、またその悩みの発生にも関わる、性別による役割分担や子育てに対する価値観・意識などをたずねた。その結果、母親・父親の7割以上が就業や家事・子育ての担い手について男女同等な性別役割観を支持しつつも実践は困難とする人が4割にものぼり、意識と現実のギャップがうかがえた。

最後に、パート3では子育て期の母親や父親が信頼する情報源やニーズから、母親・父親への子育て支援のあり方を探った。すると父母ともに園の先生や家族など「人」に信頼を寄せていること、また母親は安心して預けられる保育の確保、父親は家事や子育てしやすい職場の環境整備を最も必要としていることがわかった。

本調査から導き出される知見が、子育て支援に関わる人や団体が、支援のあり方を検討する際の基礎資料となることを期待する。

(引用文献)

ベネッセ教育総合研究所 (2021). 第6回幼児の生活アンケート

国立社会保障・人口問題研究所 (2022). 第16回出生動向基本調査

内閣府 (2023). 令和5年版男女共同参画白書 Retrieved January 11, 2024 from [https://www.gender.go.jp/about\\_danjo/whitepaper/r05/zentai/pdf/r05\\_print.pdf](https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r05/zentai/pdf/r05_print.pdf)

Super, D. E. (1980). A life-span, life-space approach to career development. Journal of Vocational Behavior, 13, 282-298.

## 調査概要

### ●調査方法

インターネットによるアンケート調査

### ●調査時期

2023年3月

### ●調査対象とサンプルサイズ

全国の0～6歳児の第1子をもつ保護者 母親：父親各2,891名 ※母親、父親は、夫婦ペアデータではない。

地域：国内全域。子どもの年齢ごとに、「首都圏3：その他7」になるように割り付け

#### 〈母親〉

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
首都圏	124	124	124	124	124	124	124
首都圏以外	289	289	289	289	289	289	289

合計 2,891名

#### 〈父親〉

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
首都圏	124	124	124	124	124	124	124
首都圏以外	289	289	289	289	289	289	289

合計 2,891名

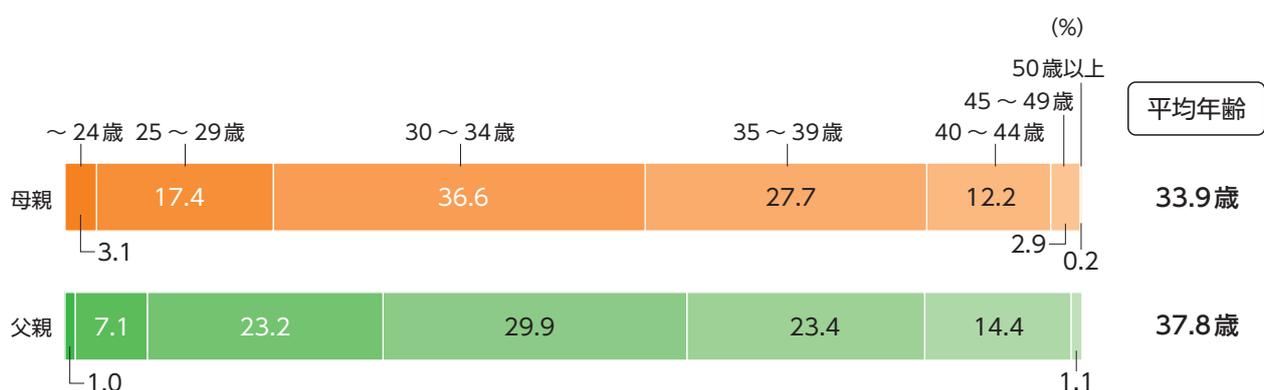
### ●調査項目

ライフキャリア(親/家庭人/職業人/個人)について理想と現実の重み、ライフキャリアの各役割についての満足度、平日・休日の時間の使い方、子ども観、仕事観、性別役割分業意識、子育て観、主観的幸福感、育児・家事の分担比率、子育てやキャリアの悩み・困りごと、信頼する子育て情報源、地域での子どもを通じた関係、子育て支援に対する期待 など

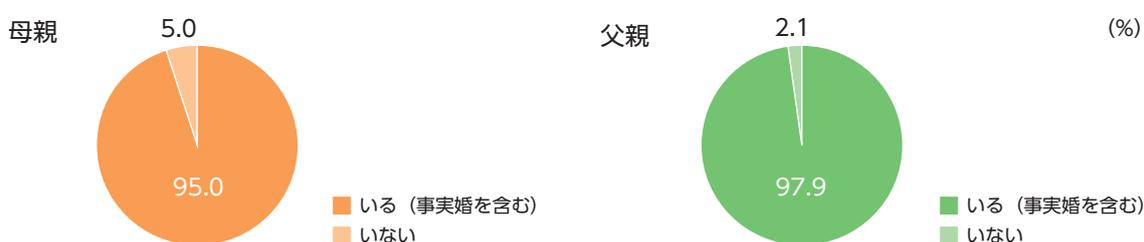
※図表で使用している百分率(%)は、小数第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。

### ●基本属性

#### 回答者年齢



#### 配偶者/パートナーの有無



### 就業形態

(%)

	母親	父親
正社員・正職員（休職中を除く）	22.1	93.6
パートタイム・アルバイト	19.1	0.8
契約社員・嘱託（休職中を除く）	1.6	0.9
派遣社員（休職中を除く）	1.2	0.4
自営業（家族従業者を含む） ・フリーランス	1.6	2.8
休職中 （病気療養、産休・育児休業等）	14.3	0.4
無職（専業主婦／主夫等）	39.9	0.6
学生	0.1	0.1
その他	0.1	0.4

### 配偶者／パートナーの就業形態

(%)

	母親	父親
正社員・正職員（休職中を除く）	83.7	51.5
パートタイム・アルバイト	4.9	15.9
契約社員・嘱託（休職中を除く）	0.9	1.7
派遣社員（休職中を除く）	0.4	1.2
自営業（家族従業者を含む） ・フリーランス	5.5	2.8
休職中 （病気療養、産休・育児休業等）	1.8	6.2
無職（専業主婦／主夫等）	2.6	20.5
学生	0.0	0.0
その他	0.1	0.1

### 対象の子ども（第1子）の年齢と分布

(%)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
母親	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3
父親	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3	14.3

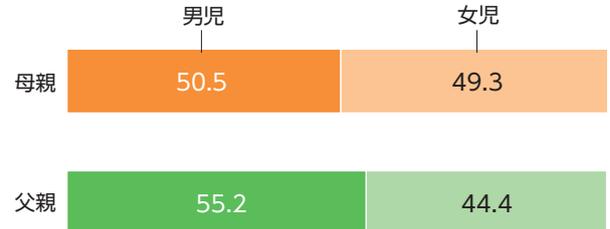
### 子どもの数

(%)



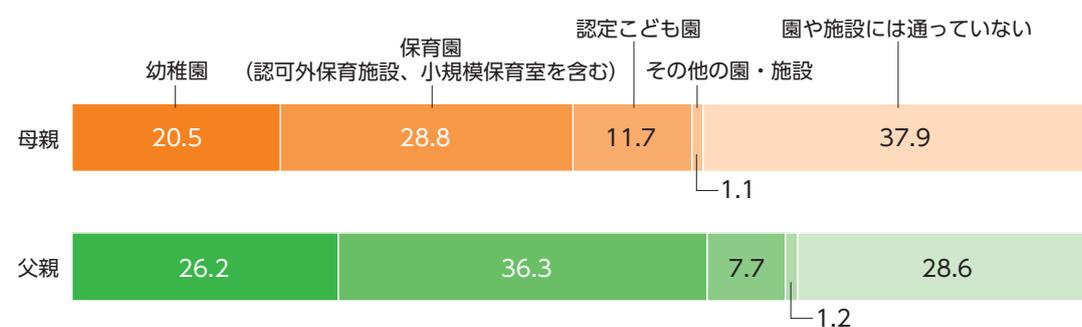
### 対象の子どもの性別

(%)

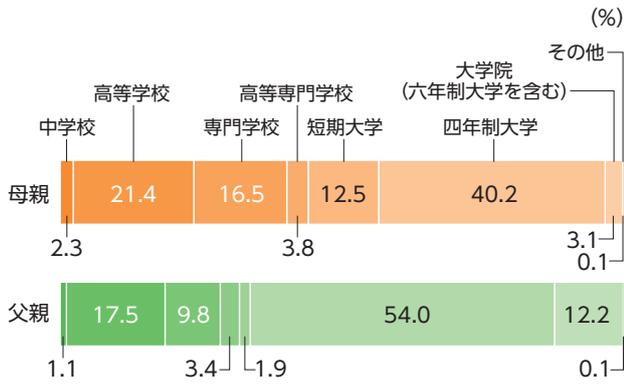


### 対象の子どもの就園状況

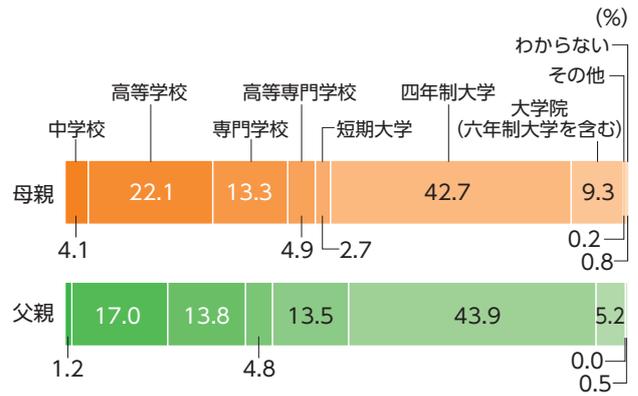
(%)



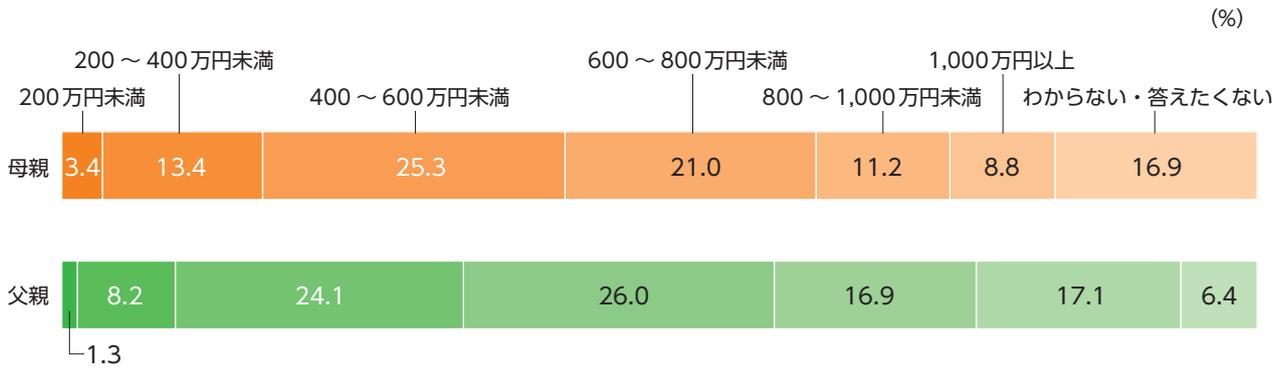
### 最終学歴



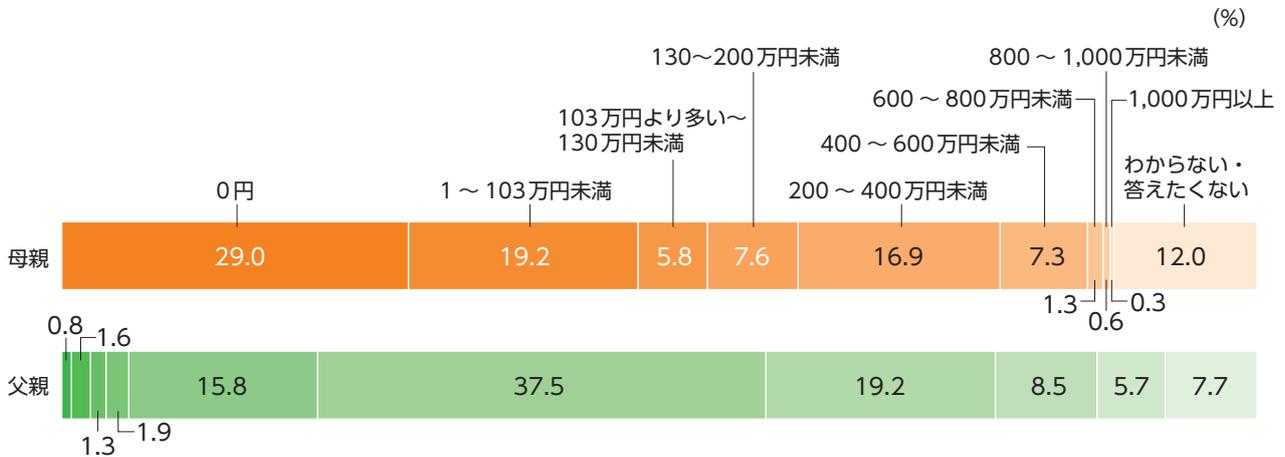
### 配偶者／パートナーの最終学歴



### 世帯収入(税込)



### 個人収入(税込)



### 同居している人

	母親 (%)	父親 (%)
子ども	99.6	97.3
配偶者／パートナー	93.1	96.1
自分の母親	5.9	5.9
自分の父親	3.9	4.5
配偶者／パートナーの母親	2.4	1.7
配偶者／パートナーの父親	1.9	1.1
父母以外の親族	2.0	1.3
その他	0.2	0.4
いない (独居)	0.0	1.3

※複数回答

### 居住地

	母親 (%)	父親 (%)
北海道	5.2	4.0
東北	5.3	5.4
北関東	4.3	3.9
首都圏	30.0	30.0
中部・北陸	9.3	10.2
中京圏	9.5	9.4
大阪圏	14.3	16.2
京阪周辺	2.7	3.1
中国	6.4	5.7
四国	2.8	2.8
九州・沖縄	10.3	9.3

1-1 ライフキャリアにおける各役割意識の理想と現実

父親や母親は、ライフキャリアにおける各役割をどのようにとらえ、両立させているのだろうか。「親」「家庭人」「職業人」「個人」の各役割の合計を10としてとらえた時に、現状、各役割にどのくらいの役割意識(重み)を割いているのか、本当はどれくらいの割合で役割意識(重み)をもちたいのか、その現実と理想的な配分について母親・父親別にたずねた。

**Q** あなたの中で以下の4つの役割は現在どれくらいの重みをもってありますか。全体の合計を10とした時のそれぞれの役割の配分を0～10の数値(整数)でお答えください。

図1-1-1 ライフキャリアにおけるの4つの役割意識(重み)の平均値(父母別)

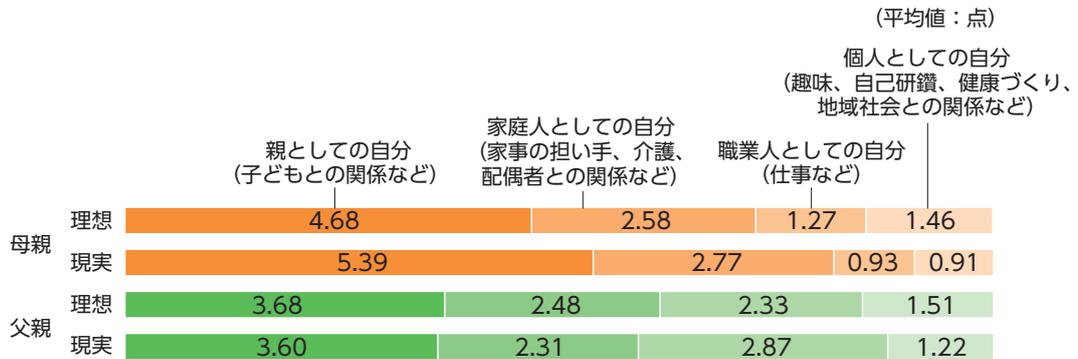
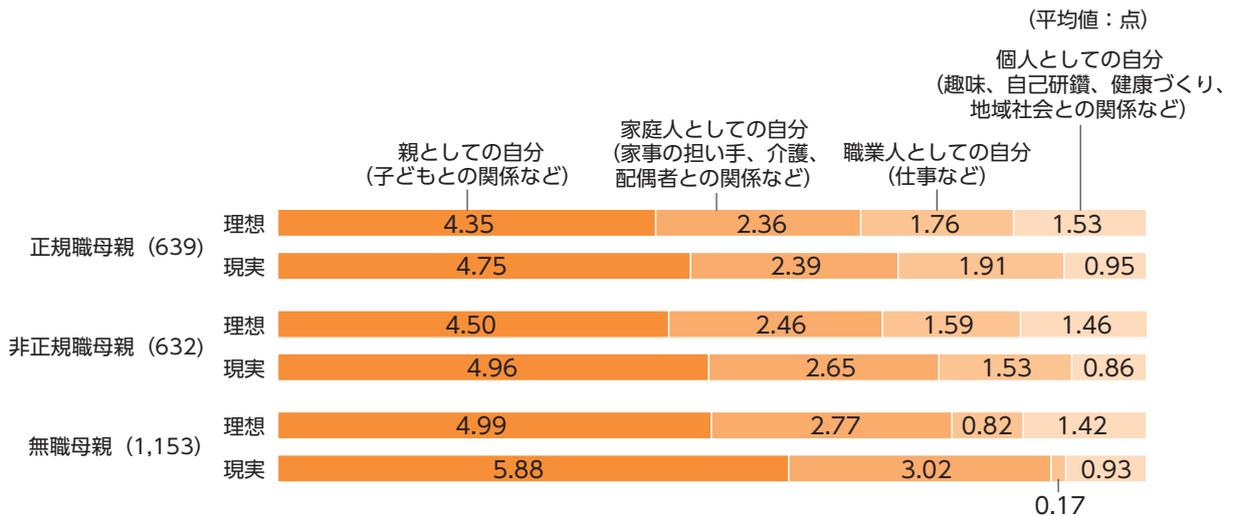


図1-1-2 ライフキャリアにおけるの4つの役割意識(重み)の平均値(母親 就業形態別)



※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」、「契約社員・嘱託」、「派遣社員」、無職は「無職(専業主婦/主夫等)」と回答した人。

Point

自分の理想に比べると、現実には母親は親・家庭人としての役割意識が高く、父親は職業人としての役割意識が高い。

各役割の「理想」と「現実」を比べると、母親は「親」「家庭人」の役割について理想より現実でより高く意識している。一方、父親は「職業人」の役割について理想より現実でより高く意識しており、「家庭人」は理想よりも現実で意識が低いことが明らかになった(図1-1-1)。また、特に無職の母親において「親」「家庭人」が理想より現実が高い傾向が見られた(図1-1-2)。

1-2 ライフキャリアの各役割満足度

母親や父親は各役割(「親」「家庭人」「職業人」「個人」)について、どれくらいの満足度をもって  
いるのだろうか。特に、母親は、雇用形態が、各役割に割くことのできる物理的時間を左右し  
ている可能性があり、母親については就業形態別に満足度をたずねた。

図1-2-1 ライフキャリアの役割に対する満足度(父母別)

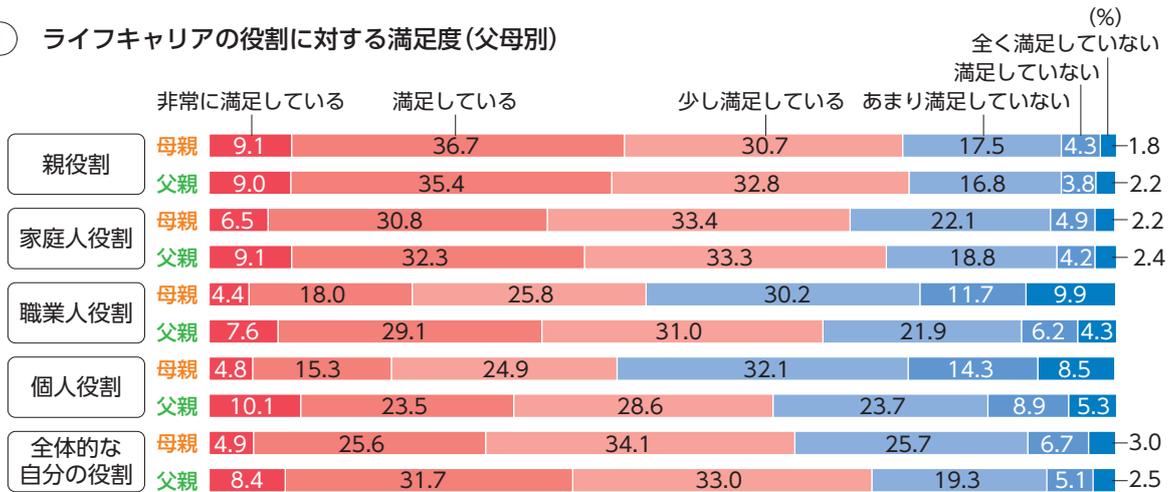
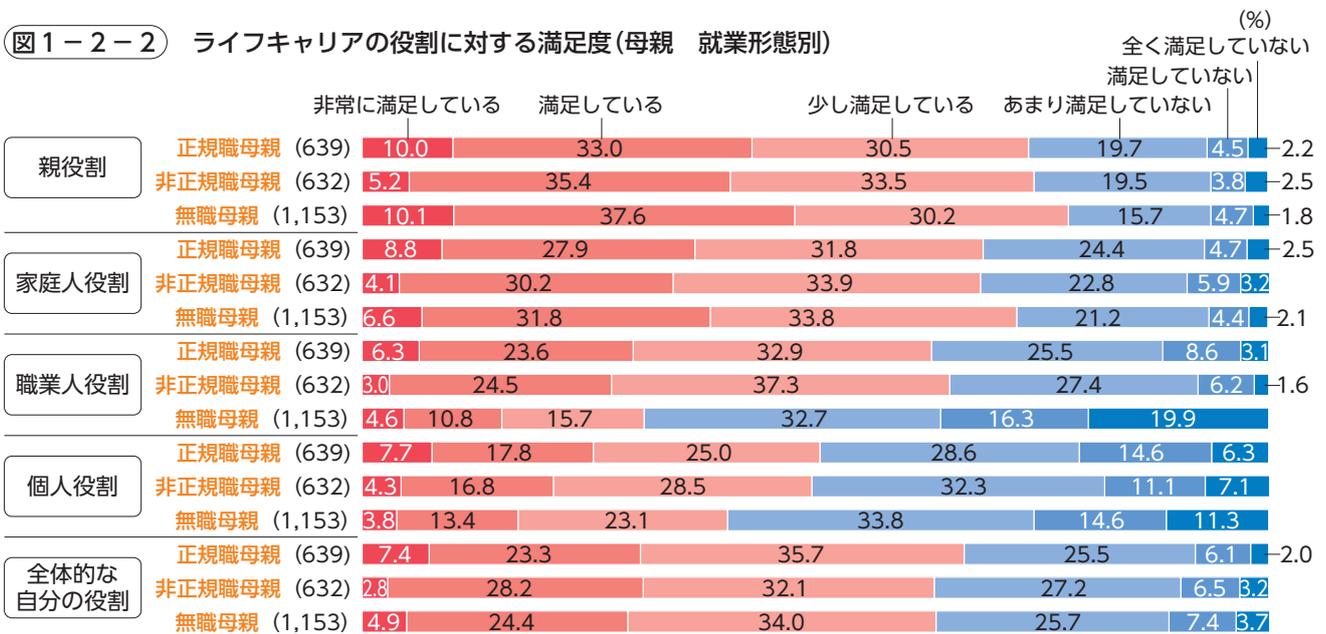


図1-2-2 ライフキャリアの役割に対する満足度(母親 就業形態別)



※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」、「契約社員・嘱託」、「派遣社員」、無職は「無職(専業主婦/主夫等)」と回答した人。

Point

ライフキャリアの各役割のうち、父親は母親に比べて、「個人としての自分の役割」への自己評価が高い。

父母別に各役割の満足度(非常に満足している+満足している+少し満足している)をみると、父母ともに「親役割」と「家庭人役割」は、7割以上が満足している(図1-2-1)。「個人役割」と「全体的な自分の役割」については、父親のほうが母親よりも高い。母親について、就業形態別にみると、「親役割」と「家庭人役割」は、無職の母親のほうが有職の母親(正規職母親+非正規職母親)より満足度が高い(図1-2-2)。しかし、「個人役割」については、有職の母親は約5割、無職の母親は約6割が不満足と回答している。

## 1-3 子育て・家事の分担

仕事との両立を目指す上での夫婦における子育てと家事の役割分担を、母親や父親はどのようにとらえているのだろうか。子育て、家事の具体的な分担比率について、母親・父親別、就業形態別にそれぞれの認識をたずねた。

**Q** 子育てや家事について、あなたが分担している比率をお答えください。

図1-3-1 子育ての分担(父母別)

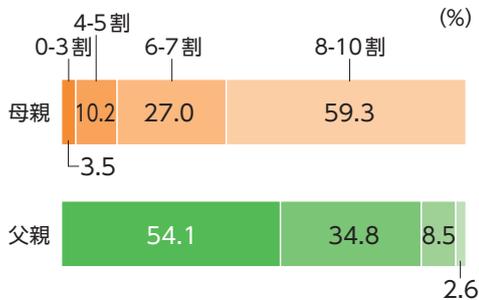


図1-3-2 家事の分担(父母別)

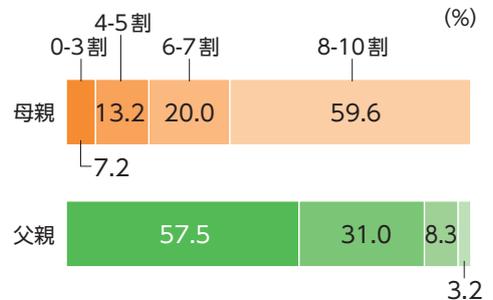


図1-3-3 子育ての分担(母親 就業形態別)

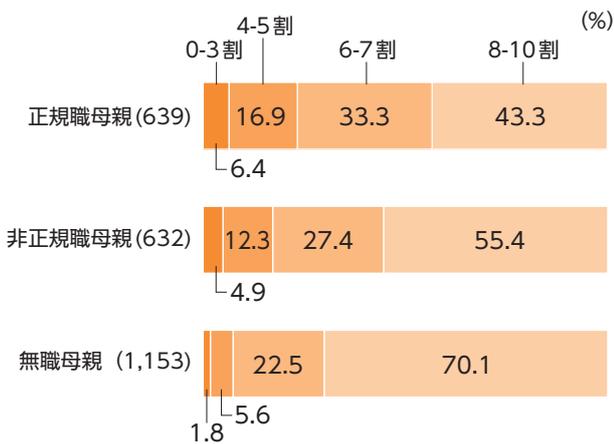
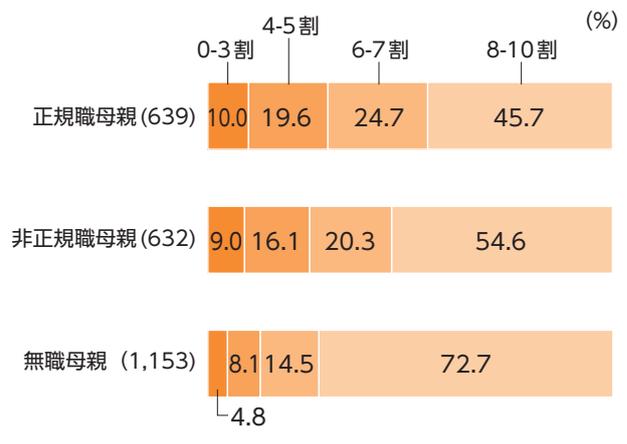


図1-3-4 家事の分担(母親 就業形態別)



※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」、「契約社員・嘱託」、「派遣社員」、無職は「無職（専業主婦／主夫等）」と回答した人。

### Point

**子育て・家事の分担は、就業形態に関わらず、母親が主として担っている。**

子育てと家事の分担比率を0-10割の11段階でたずねたところ、子育て・家事とも、母親の分担比率が高かった(図1-3-1、図1-3-2)。母親の就業形態別では、無職母親の7割以上が、子育てと家事を「8-10割」担っていると回答した(図1-3-3、図1-3-4)。一方、正規職や非正規職の母親で、子育てや家事を「8-10割」担っていると回答した比率は4~5割であった。次いで父親の子育て・家事の分担比率をみると、5割以上が「0-3割」、3割程度が「4-5割」を担っていると回答した。これらの結果は、「1-4 平日・休日の時間」で示した、子育てや家事に費やす時間の傾向と整合性のある結果となっている。

1-4 平日・休日の時間

ライフキャリアにおける各役割に対して母親や父親は、どの程度、子育てや日常生活に時間を費やすことができているのだろうか。平日・休日の時間の使い方について、母親・父親別、また母親の就業形態別にその実態を確認した。

図1-4-1 平日の時間(父母別)

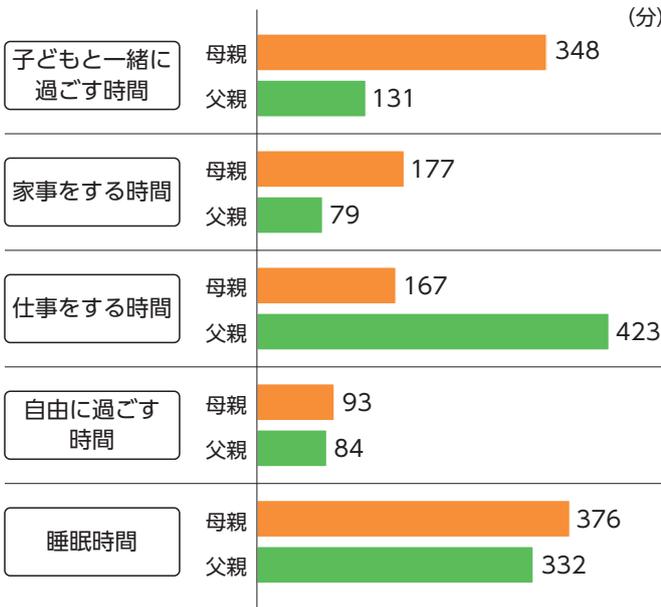


図1-4-2 休日の時間(父母別)

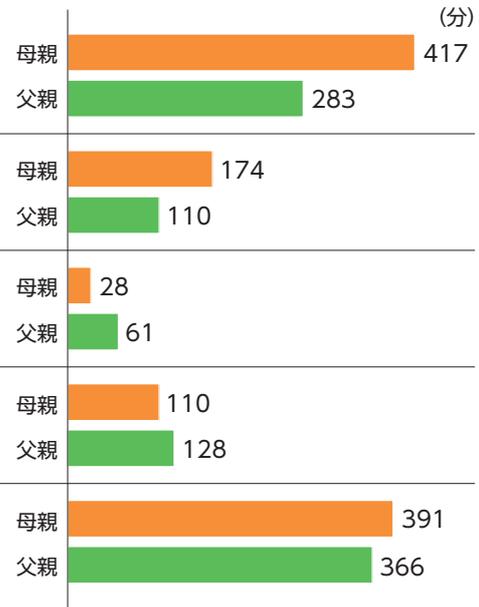


表1-4-1 平日の時間(母親 就業形態別)

	子どもと一緒に過ごす時間	家事をする時間	仕事をする時間	自由に過ごす時間	睡眠時間
正規職母親 (639)	240	142	379	71	365
非正規職母親 (632)	286	162	298	86	374
無職母親 (1,153)	418	206	17	109	383

表1-4-2 休日の時間(母親 就業形態別)

	子どもと一緒に過ごす時間	家事をする時間	仕事をする時間	自由に過ごす時間	睡眠時間
正規職母親 (639)	390	168	40	109	391
非正規職母親 (632)	392	172	48	111	391
無職母親 (1,153)	437	182	14	111	391

※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」、「契約社員・嘱託」、「派遣社員」、無職は「無職（専業主婦／主夫等）」と回答した人。 ※「0分くらい」～「12時間くらい」「12時間より多い」まで30分刻みで回答した結果を分に置き換え、平均値（分）を算出。

Point

平日に「子どもと一緒に過ごす時間」「家事をする時間」は、母親は父親の約2倍になる。

平日に「子どもと一緒に過ごす時間」と「家事をする時間」は、就業形態に関わらず、母親は父親の約2倍の時間、取り組んでいる(図1-4-1、表1-4-1)。母親は、無職母親が、子どもと一緒に過ごすことと家事に最も長い時間を費やしており、次いで、非正規職母親、正規職母親となる(表1-4-1)。「仕事をする時間」は父親が最も長く423分であった。「自由に過ごす時間」は平日は無職母親が最も長い、有職の母親(正規職母親+非正規職母親)との差は20～30分程度であった。平日の「睡眠時間」は、父親が最も短く332分であった。

休日については、仕事をもつ母親は、「子どもと一緒に過ごす時間」が平日と比べて100分以上、長くなる(表1-4-1、表1-4-2)。また、父親については「家事をする時間」が、休日は平日に比べて30分強長くなっており、週末により長く家事に取り組むことがうかがえる(図1-4-1、図1-4-2)。「自由に過ごす時間」は、無職の母親以外は、平日に比べて20～40分程度長くなっている。「睡眠時間」は父母ともに平日に比べて10～30分程度長くなっている。

1-5 さまざまな活動への取り組み

母親や父親は、仕事、育児、家事以外の時間をどのように過ごしているのだろうか。心も身体も健康的に生活をしていくためには、余暇活動などを通じて社会と接点をもちながら、「一個人としての自分」も大切にしていけることが重要だろう。そこで子育て世代の母親・父親のさまざまな活動の取り組みについて確認した。

**Q** それぞれの活動において、あなたの取り組みに最も近いものを選択してください。

図1-5-1 さまざまな活動への取り組み(父母別)

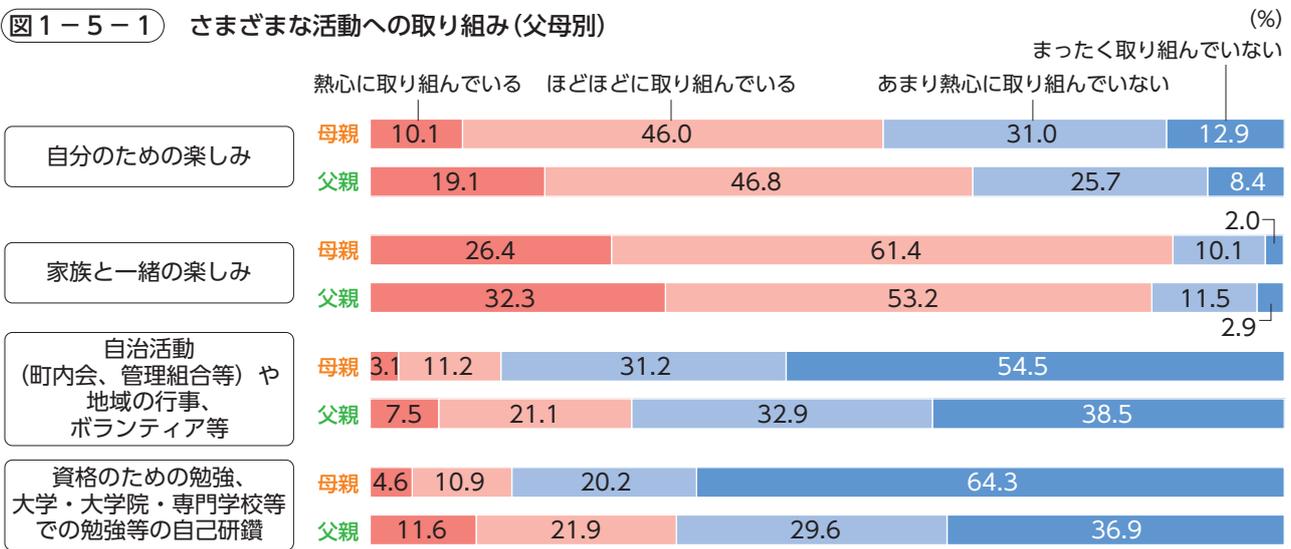


図1-5-2 自分のための楽しみ(母親・就業形態別)

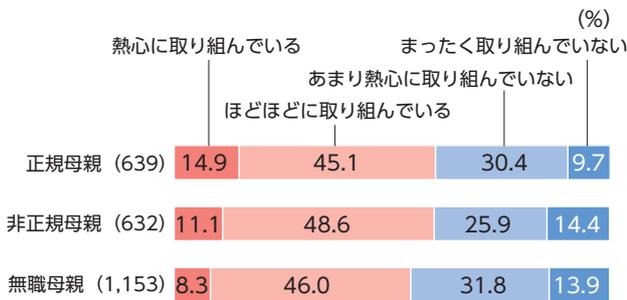
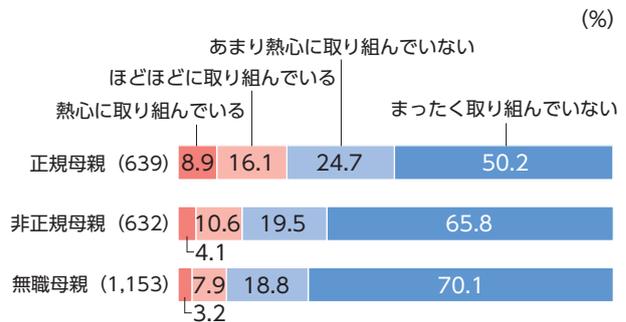


図1-5-3 資格のための勉強、大学・大学院・専門学校等での勉強等の自己研鑽(母親・就業形態別)



※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」「契約社員・委託」「派遣社員」、無職は「無職(専業主婦/主夫等)」と回答した人。

**Point**

**自分のための楽しみ・ボランティア・自己研鑽には、母親より父親のほうがより熱心に取り組んでいる。**

仕事、育児、家事、睡眠等以外のさまざまな活動への取り組みをみると、「家族と一緒に楽しむ」は母親・父親ともに8割以上が取り組んでいる(「熱心に取り組んでいる」+「ほどほどに取り組んでいる」、図1-5-1)。一方、「自分のための楽しみ」「自治活動や地域の行事、ボランティア等」「資格のための勉強、大学・大学院・専門学校等での勉強等の自己研鑽」は、母親より父親のほうが取り組んでいる比率が高い。母親の就業形態別にみると、正規職の母親が「自分のための楽しみ」に取り組む比率が、無職の母親に比べてより積極的な傾向がうかがえ(図1-5-2)、「資格のための勉強や自己研鑽」も、正規職の母親の取り組み比率が、非正規職、無職の母親に比べて高い(図1-5-3)。

1-6 子育てやキャリアに関する悩み

子育て世代の母親や父親は、子育てやキャリアについてどのような悩みを抱えているのだろうか。各項目に対する悩みの頻度をたずね、回答結果(「よくある」「時々ある」の合計%)から、悩みの全体像の把握と優先度を整理した。

**Q** 現在のあなたの状況について、以下のような悩みを感じることはどのくらいありますか。以下の各項目について、それぞれあてはまるものを選択してください。

図1-6-1 子育てやキャリアに関する悩み(父母別)

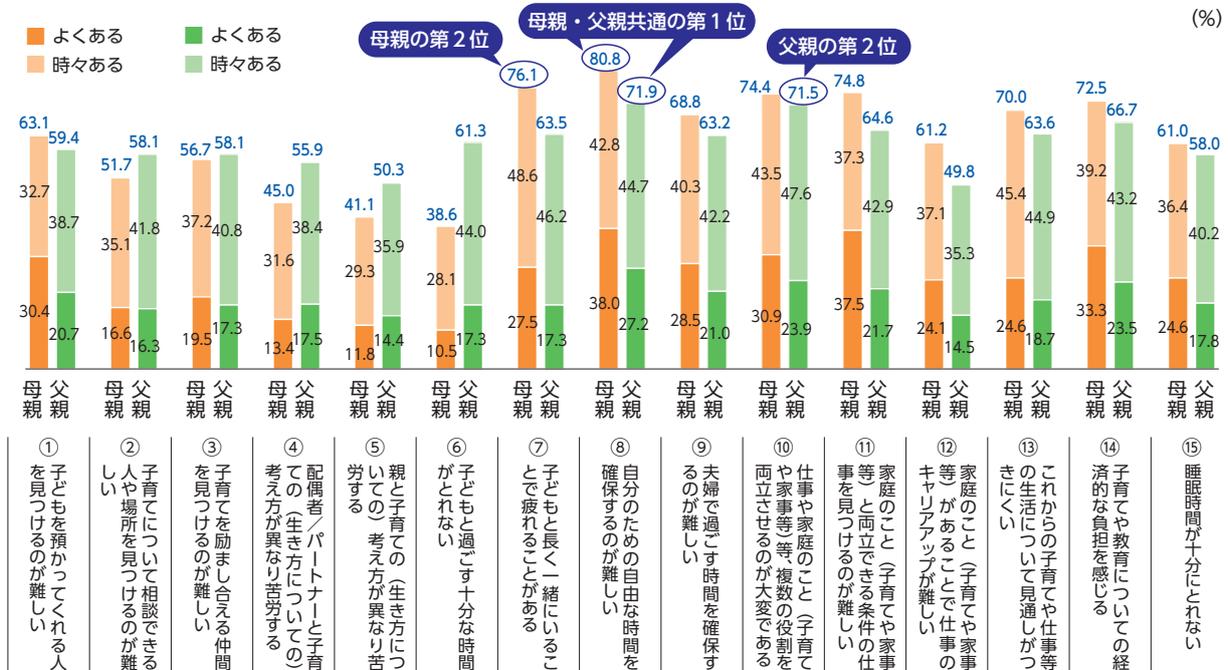


表1-6-1 子育てやキャリアに関する悩み(母親・就業形態別)

就業形態	順位	悩み	割合 (%)	
			よくある	時々ある
正規職母親 (639)	第1位	⑧ 自分のための自由な時間を確保するのが難しい	40.7	43.0
	第2位	⑩ 仕事や家庭のこと(子育てや家事等)等、複数の役割を両立させるのが大変である	34.7	45.5
	第3位	⑦ 子どもと長く一緒にいることで疲れることがある	23.8	51.3
非正規職母親 (632)	第1位	⑦ 子どもと長く一緒にいることで疲れることがある	26.9	48.9
	第2位	⑭ 子育てや教育についての経済的な負担を感じる	35.6	39.4
	第3位	⑧ 自分のための自由な時間を確保するのが難しい	34.2	40.7
無職母親 (1,153)	第1位	⑧ 自分のための自由な時間を確保するのが難しい	36.0	44.1
	第2位	⑪ 家庭のこと(子育てや家事等)と両立できる条件の仕事を見つづけるのが難しい	45.9	34.1
	第3位	⑦ 子どもと長く一緒にいることで疲れることがある	30.8	47.0

※正規職は「正社員・正職員」、非正規職は「パートタイム・アルバイト」「契約社員・委託」「派遣社員」、無職は「無職(専業主婦/主夫等)」と回答した人。

Point

母親・父親ともに子育てやキャリアに関する悩みとして「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」が第1位。

分析の結果、第1位は「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」(項目⑧)で、8割の母親、7割の父親が子育てやキャリアに関するもっとも大きな悩みとして回答している(図1-6-1)。母親の第2位は「子どもと長く一緒にいることで疲れることがある(76.1%)」(項目⑦)、父親は「仕事や家庭のこと(子育てや家事等)等、複数の役割を両立させるのが大変である(71.5%)」(項目⑩)であった。母親を就業形態別にみると、上位3つのうち、2つは共通するが、残りの1つは就業形態ごとに異なっていた。正規職母親は「仕事や家庭のこと(子育てや家事等)等、複数の役割を両立させるのが大変である」(項目⑩)、非正規母親は「子育てや教育についての経済的な負担を感じる」(項目⑭)、無職母親は「家庭のこと(子育てや家事等)と両立できる条件の仕事を見つづけるのが難しい」(項目⑪)が上位にあがっており、就業形態に応じた支援の必要性がうかがえる(表1-6-1)。

# 正規職として働く母親の子育てやキャリアの悩みと子育て感情

ベネッセ教育総合研究所 持田 聖子

パート1では、乳幼児を子育て中の父母のライフキャリアに焦点をあて、家庭（親・家庭人）と仕事、個人の役割の重みづけをどのように考えているか、実態、悩み等をたずねた。その結果、母親は、家事や育児等の家庭役割は理想に比べると、現実のほうが重いと認識しており、実際の家事や育児は主に母親が担っていることが裏づけられた。

現在の日本は、1993年より共働きの家庭が専業主婦家庭を上回り、増加している（厚生労働省,2021a）。また、女性の第1子出産時の就業継続率が上昇し、全体では69.5%、正規職に限ると83.4%となった（国立社会保障・人口問題研究所,2022）。このように出産しても離職せず、就業継続する母親が増加しているが、子育てや家事の分担比率をみると、就業形態による違いはあれ、前述のとおり、母親が主たる担い手となっていた（図1-3-1、図1-3-2参照）。仕事と家庭の多重役割を担うことによる葛藤は、Work-family conflictと呼ばれ、「仕事と家庭の役割間葛藤の一形態であり、仕事役割からの圧力と家庭役割からの圧力が互いに矛盾するときに生じる葛藤」と定義されている（Greenhaus & Beutell,1985）。こうした仕事と家庭の両立に関する葛藤は、特に就業時間がより長い正規職の母親は高く感じる事が予測される。正規職の母親は、厚生労働省（2021b）によると、末子が3歳の母親の34.5%は「正規の職員・従業員」で、非正規職の比率（31.8%）を上回っており、また、過去と比べて正規職での就業継続者が増えていることが明らかになっている。

そこで、本稿では、今後、増加が予測される「正規職で働く母親」に着目し、子育てやキャリアに対してどんな悩みや葛藤を感じているか、また悩みの高低と子育て感情との関連を分析する。

「子育てやキャリアに関する悩み」として15項目を独自に作成し、「よくある」～「ぜんぜんない」の4件法で回答してもらった（15項目の内容と全体の回答は図1-6-1のとおりである）。そのうち、正規職母親の悩みの第1位は「自分のための自由な時間を確保するのが難しい（「よくある」+「時々ある」83.7%）」、第2位に「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である（「よくある」+「時々ある」80.2%）」というWork-family conflictに関する項目があがった。第1位の項目は、母親全体でも第1位の悩みとしてあがっており（図1-6-1）、乳幼児をもつ親の普遍的な悩みといえるが、特に、正規職の母親の値は高く（表1-6-1）、実際、「自由に過ごす時間」は無職（専業主婦等）や非正規職の母親と比べると最も少ないため（表1-4-1、表1-4-2）、悩みとして筆頭にあがることがわかった。

「複数の役割」を職業人役割と親・家庭人役割としてとらえると、複数の役割を両立することの大変さは、加藤・金井（2007）がWork-family conflictを4つの下位概念に分類したもののうち、「時間葛藤（例、『仕事と家事とで忙しい』）」や「仕事→家庭葛藤（例、『仕事のために、家でやりたいと思うことをやれずにいる』）」、「家庭→仕事葛藤（例、『家事のために、仕事でやりたいと思うことをやれずにいる』）」に相当するといえる。

「自分のための自由な時間の確保の難しさ」については、平日の正規職母親の「自由に過ごす時間」は非正規職や無職の母親に比べて少ないことがわかった。また、「子どもと一緒に過ごす時間」、「家事をする時間」も非正規職や無職の母親に比べて少ないが、その分、「仕事をする時間」が多いことから、主に仕事によって個人の時間が取りにくくなっていると考えられる（表1-4-1）。

では、どうすれば正規職の母親のWork-family conflictの悩みの軽減や、自分のための時間を確保することができるのだろうか。正規職の母親の悩みの第1位と第2位であった「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」と「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である」について、「よくある」と「時々ある」と回答したケースを「悩み高群」、「あま

りない」と「ぜんぜんない」と回答したケースを「悩み低群」として、子育てと家事の分担比率とのクロス分析をしたところ、「悩み高群」は「悩み低群」と比べて、子育てや家事を「8～10割」担っている比率が高かった（図1-a～d）。いわゆる「ワンオペ」での子育てや家事により、正規職の母親は、自分のための自由な時間がもてない悩み、仕事と家庭の両立に関する悩みを強く感じていることがわかる。正規職としてフルタイムで働いた上、ケアの必要な乳幼児の子育てや、家事を「ワンオペ」で行うことは、大変な労力を要する毎日である。Bianchi et al (2006) によると、働く母親は、子どもとの時間（子育て）や睡眠時間は確保し、家事を軽減することで、調整を図っているという。家事を軽減する工夫として、毎日行う必要のある家事と週末等にまとめて行えばよい家事を分類したり、「名もなき家事・見えない家事」等と呼ばれるような細かな家事のリストアップ等をして見直したり、家事に求める質を低減する等の見直し、配偶者／パートナーやその他の家族との分担の相談、外注等のソーシャル・サポートの活用、IoTを活用した便利な家電の活用を積極的に考えてみるなど、「ワンオペ」にならないような方策を見直してみることも大切であろう。また、「仕事をする時間」の平均値（分）を自分の時間が持てない悩みの低群と高群で比較すると、高群の方が仕事をする時間が30分強、多くなっていた（10%傾向で有意）。仕事の効率化ツールの活用や、仕事への取り組み方やスケジュールリングを見直す等、仕事の時間を減らせるような工夫もしてみる価値があるかもしれない。

図1-a 自分の時間が取れない悩み(高群・低群)と育児分担比率



図1-b 自分の時間が取れない悩み(高群・低群)と家事分担比率



図1-c 仕事と家庭の両立の悩み(高群・低群)と育児分担比率

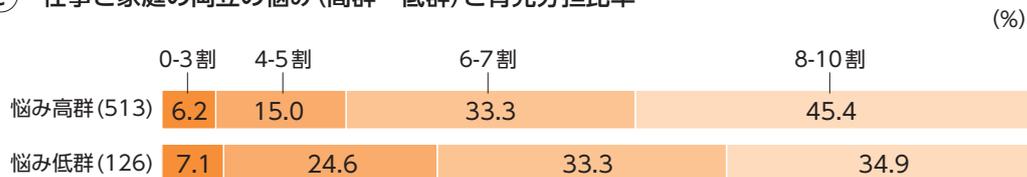


図1-d 仕事と家庭の両立の悩み(高群・低群)と家事分担比率

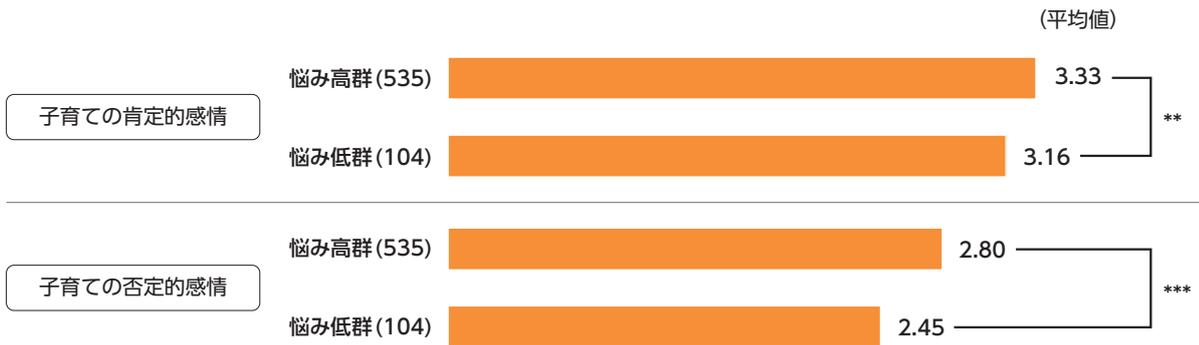


※「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」について「よくある」「時々ある」と回答した人を「悩み高群」、「あまりない」「ぜんぜんない」と回答した人を「悩み低群」とした。

※「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である」について「よくある」「時々ある」と回答した人を「悩み高群」、「あまりない」「ぜんぜんない」と回答した人を「悩み低群」とした。

また子育てやキャリアの悩みと、正規職の母親の子育て感情との関連を分析した。図1-eと図1-fは、2つの悩みの高群・低群について、子育ての肯定的感情・否定的感情の平均値を比較した結果である。「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」の悩みの高群は、低群と比べて、子育ての肯定的感情は有意に高く、同時に否定的感情も有意に高かった。自分の時間を削り、子育てを行うことで子育ての楽しさや自信も感じるが、同時にいろいろな感じたり子どもに八つ当たりしたくなるような否定的な感情もあるのではないだろうか。「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である」の悩みの高群は、低群と比べて子育ての否定的な感情が有意に高かった。このように、正規職として働く母親のWork-family conflictに関する悩みが、子育てへの感情に関連することから、こうした悩みの軽減につながる方略を、家庭単位だけでなく、社会の仕組みとして考えていく必要がある。

図1-e 自分の時間が取れない悩みの高・低2群×子育ての肯定的感情・否定的感情(t検定)



※ 「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」について「よくある」「時々ある」と回答した人を「悩み高群」、「あまりない」「ぜんぜんない」と回答した人を「悩み低群」とした。子育ての肯定的感情（1～4点）・子育ての否定的感情（1～4点）の平均値の差の検定。\*\*p<.01 \*\*\*p<0.001

図1-f 仕事と家庭の両立の悩みの高・低2群×子育ての肯定的感情・子育ての否定的感情



※ 「仕事や家庭のこと（子育てや家事等）等、複数の役割を両立させるのが大変である」について「よくある」「時々ある」と回答した人を「悩み高群」、「あまりない」「ぜんぜんない」と回答した人を「悩み低群」とした。子育ての肯定的感情（1～4点）・子育ての否定的感情（1～4点）の平均値の差の検定。\*\*\*p<0.001

(引用文献)

Bianchi, S. M., Robinson, J. P., & Milkie, M. A. (2006). Changing rhythms of American family life. New York: Russell Sage Foundation.

加藤容子・金井篤子 (2007). 共働き夫婦におけるワーク・ファミリー・コンフリクトー「クロスオーバー効果」と「対処行動の媒介・緩衝効果」の吟味ー 産業・組織心理学研究, 20(2), 15-25.

国立社会保障・人口問題研究所 (2022). 第16回出生動向基本調査 Retrieved January 11, 2024 from [https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/doukou16\\_gaiyo.asp](https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/doukou16_gaiyo.asp)

厚生労働省 (2021a). 令和3年版厚生労働白書

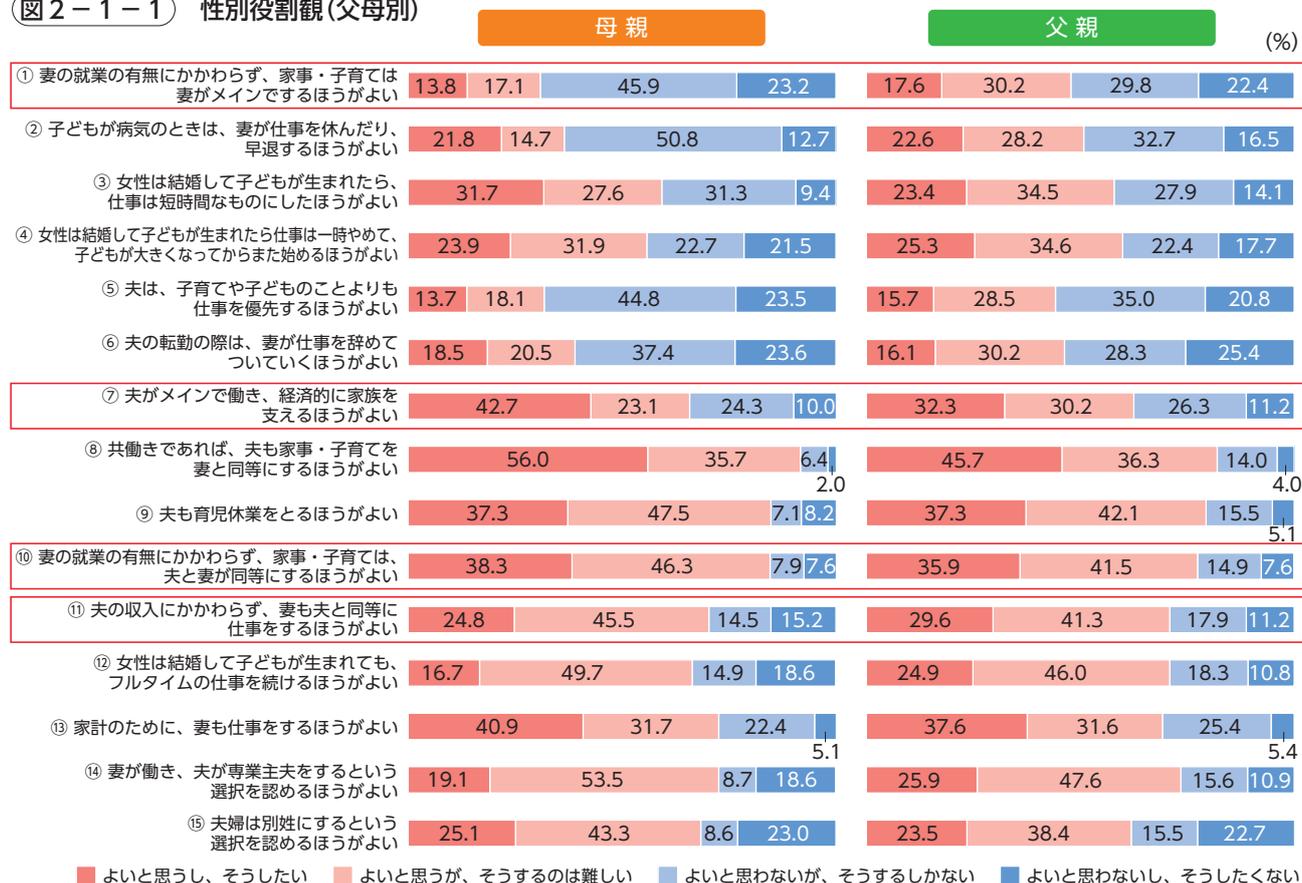
Greenhaus, J.H. & Beutell, N. J. (1985). Sources of Conflicts between Work and Family Roles. The Academy of Management Review, 10(1), 76-88.

厚生労働省 (2021b). 国民生活基礎調査 Retrieved January 11, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-21.html>

働く母親の増加や、父親の育児休業制度の拡充など働き方や子育て環境が変化する中で、子育て世代は、家事や子育て、仕事に関してどのような性別役割観をもっているのだろうか。家事・子育て・仕事等における伝統的な性別役割観、男女同等な役割観について、賛否とその実現度を掛け合わせた4件法でたずねた。

Q 「性別による役割観」に対するあなたのお考えについてお伺いします。

図2-1-1 性別役割観(父母別)



### Point

家事・子育ても仕事も同等に分担することを、母親・父親ともに約7割が支持しながらも、4割以上は「そうするのが難しい」と回答。

母親の役割について「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては妻がメインであるほうがよい」(項目①)に対し「よいと思わない」と否定する母親(「よいと思わないが、そうするしかない」と「よいと思わないし、そうしたくない」の合計)は約7割であるが、45.9%は「よいと思わないが、そうするしかない」とあきらめている。また「夫の収入にかかわらず、妻も夫と同等に仕事をするほうがよい」(項目⑪)は母親・父親ともに7割が「よいと思う」(「よいと思うし、そうしたい」と「よいと思うが、そうするのは難しい」の合計)と肯定するも、4割以上が「よいと思うが、そうするのは難しい」と実現は難しいとしている。

父親の役割については、6割以上の母親・父親が「夫がメインで働き、経済的に家族を支えるほうがよい」(項目⑦)に対し「よいと思う」と肯定し、特に母親は4割以上が「よいと思うし、そうしたい」と強い肯定が多い。一方で「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては、夫と妻が同等にするほうがよい」(項目⑩)に母親・父親ともに約8割が「よいと思う」と肯定しつつも、4割以上が「よいと思うが、そうするのは難しい」つまり実現は困難と回答している。

以上の結果から、母親にとっても父親にとっても、男女同等な役割観が支持されつつも伝統的な性別役割観も残っており、それぞれに負荷がかかった状態がうかがえる。

## 2-2 子育てについての考え方：自分の生き方

子育て世代において「親役割」は重要なライフロールとなるが、それ以外の役割とのバランスをどのように考えているのだろうか。特に「職業人」役割をもつ働く母親はどのようにとらえているか。子育てに関する考え方として「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と「子どものためには、自分がかまざるのはしかたない」のどちらに近いかをたずねた。

- Q** 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。  
 どちらかといえば近いほうの意見を選択してください。  
 【A】子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい  
 【B】子どものためには、自分がかまざるのはしかたない

図2-2-1 子育て観①自分の生き方(父母別)

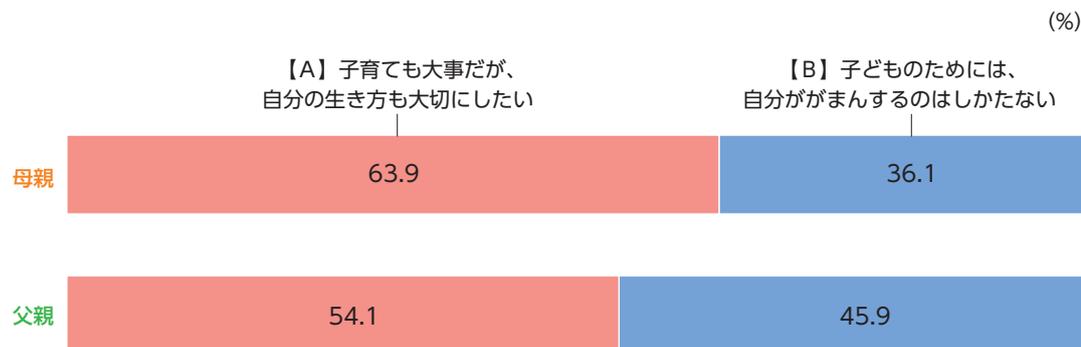
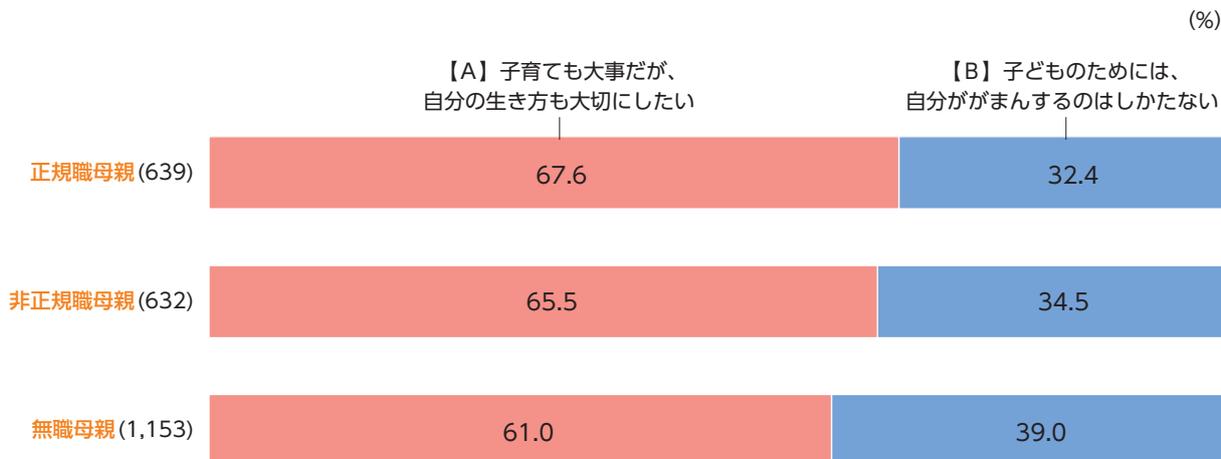


図2-2-2 子育て観①自分の生き方(母親・就業形態別)



※「正規職母親」は、調査時点で「正社員・正職員」を選択。「非正規職母親」は、「パートタイム・アルバイト」「契約社員・嘱託」「派遣社員」を選択。「無職母親」は「無職（専業主婦／主夫等）」を選択。  
 ※「休職中」はいずれにも含まれない。

**Point**

母親の6割以上が「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と回答。

母親の63.9%が「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と回答している。父親の回答は54.1%で、母親に比べて、約10ポイント低い(図2-2-1)。母親を就業形態別にみると、無職の母親よりも有職の母親のほうが「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」が高くなる傾向が見える(図2-2-2)。

## 2-3 子育てについての考え方：3歳児神話

日本は子育てにおいて母親の「親役割」を重視する傾向があるが\*<sup>1</sup>、現役の子育て世代はどのように考えているのか。「3歳児神話」と呼ばれる子育てに関する考え方について、「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」のどちらに近いかをたずねた。なお、3歳児神話への支持は就業形態への影響が考えられるため、母親の就業形態による違いを確認した。

\* 1. 内閣府 (2007). 平成 17 年度少子化社会に関する国際意識調査より

- Q** 子育てに関するAとBの2つの意見のうち、あなたのお気持ちに近いほうはどちらですか。どちらかといえば近いほうの意見を選択してください。
- 【A】子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい  
【B】母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい

図 2-3-1 子育て観②3歳児神話(父母別)

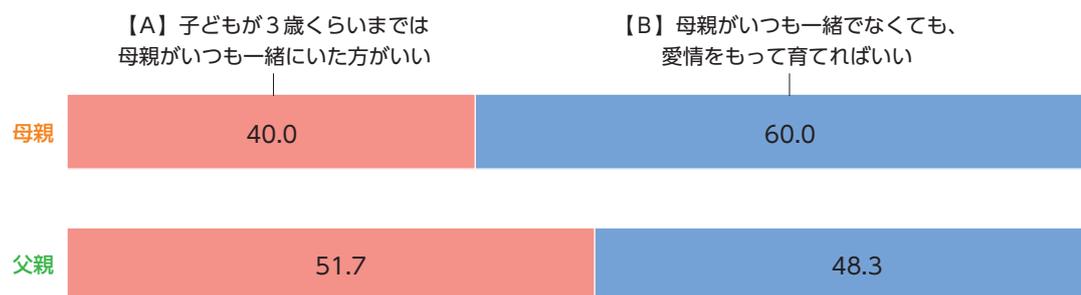
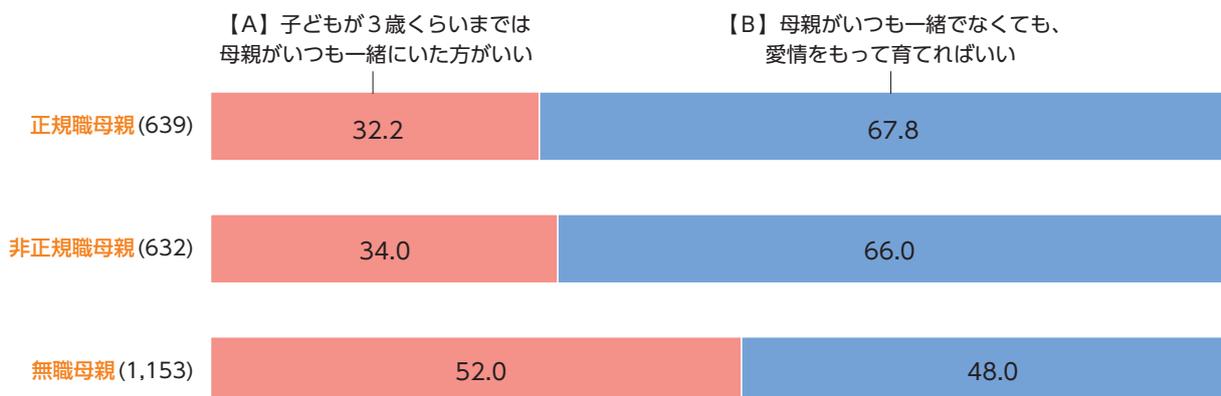


図 2-3-2 子育て観②3歳児神話(母親・就業形態別)



※ 「正規職母親」は、調査時点で「正社員・正職員」を選択。「非正規職母親」は、「パートタイム・アルバイト」「契約社員・嘱託」「派遣社員」を選択。「無職母親」は「無職（専業主婦／主夫等）」を選択。

※ 「休職中」はいずれにも含まれない。

### Point

母親の約6割が「母親がいつも一緒になくても、愛情をもって育てればいい」と回答。母親が有職の場合、無職に比べてよりその傾向が強い。

「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と回答したのは、母親が40.0%、父親が51.7%で、父親のほうが「3歳児神話」を信じる傾向が強い結果となった(図2-3-1)。

ただし、母親を就業形態別にみると、無職の母親は「子どもが3歳くらいまでは母親がいつも一緒にいた方がいい」と回答したのは52.0%で、有職の母親よりも約20%高い。正規職の母親と非正規職の母親では大きな違いはみられなかった(図2-3-2)。3歳児神話に関しては、父母間、また母親は就業の有無により差が生じている。

## 2-4 子育ての意識

子育て世代は日々の子育てに対して、どのような感情を抱いているのだろうか。子育てに関する肯定的感情、否定的感情についてそれぞれどのくらい感じることをたずねた。

**Q** あなたは最近、子育てについて次のようなことを感じることはありますか。

図2-4-1 子育ての肯定的感情(父母別)

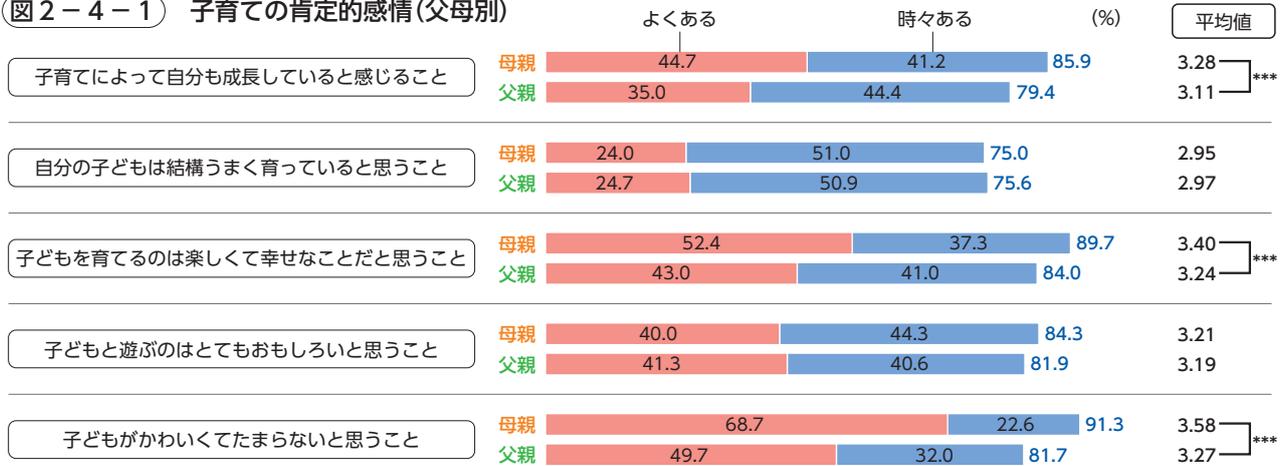
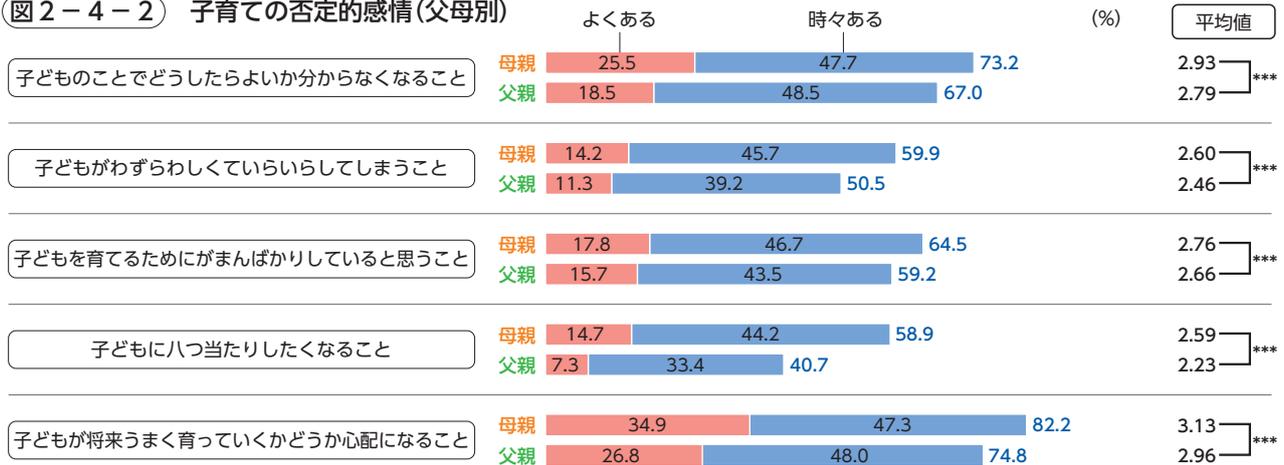


図2-4-2 子育ての否定的感情(父母別)



### Point

**母親のほうが父親よりも、子育ての肯定的感情・否定的感情ともに高い。**

子育てについて感じる肯定的感情については、「子育てによって自分も成長していると感じること」、「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだと思うこと」、「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」について母親の回答のほうが父親の回答よりも有意に高かった(図2-4-1)。なかでも「子どもがかわいくてたまらないと思うこと」は母親の9割以上が「よくある+時々ある」と回答し、父親に比べて10ポイント程度高かった。

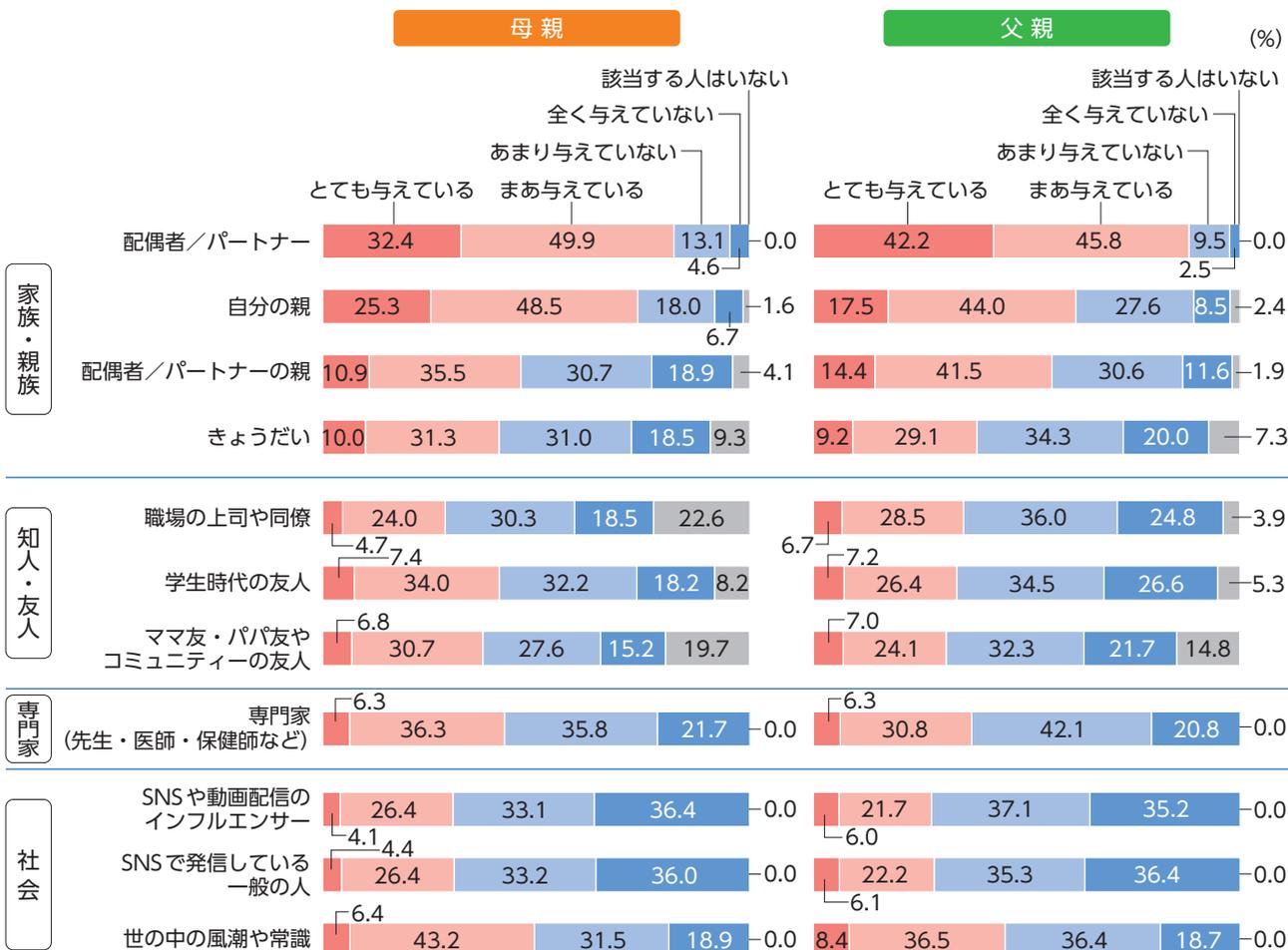
子育てについて感じる否定的感情については、5項目すべてについて、母親の回答のほうが父親の回答よりも有意に高い(図2-4-2)。特に「子どもに八つ当たりしたくなること」、「子どもがわずらわしくていらいらしてしまうこと」については、母親のほうが10ポイント程度、高くなっている。

## 2-5 子育て観・仕事観・性別役割観に影響を与えている人・環境

母親・父親の、子育てや仕事、男女の役割についての価値観はどのように形成されるのか。家族や知人、先生などの身近な人、SNSや世の中の風潮・常識などが、自分の価値観にどの程度影響しているかをたずねた。

**Q** 以下の人や環境は、あなたの子育て観や仕事観、男女の役割観にどのくらい影響を与えていますか？それぞれあてはまるものを選択してください。

図2-5-1 価値観に影響を与えている人・環境(父母別)



※「その他」は省略。

※「母親」の回答には、「休職中」「無職」が含まれる(全体の54.2%)。

### Point

**価値観に影響を与えているのは、父母ともに「配偶者／パートナー」が最も大きく、次いで「自分の親」。また家族以外では「世の中の風潮や常識」の影響が大きい。**

父母ともに「配偶者／パートナー」の影響が8割を超え(「とても与えている」+「まあ与えている」)、互いに大きな影響を与え合っているが、父親のほうが相手からの影響をより強く受けている。次いで父母ともに「親」からの影響が大きい。また「自分の親」からの影響は父親よりも母親のほうが強く受けている。

また父親の約15%、母親の約20%が、パパ友・ママ友がいないと回答しており、子育てや仕事、男女の役割などの価値観形成には夫婦や親子といった家族内からの影響が大きいことが示唆される。

またSNSなどの影響は父母ともに3割程度だが、「世の中の風潮や常識」については母親で約5割、父親で4割以上となっている。

# 男女の役割における価値観と現実のギャップ解消に向けて

— 父親の家事・子育てに対する役割観に注目して —

ベネッセ教育総合研究所 森永 純子

近年の子育て世帯への支援は、母親の仕事と家事・子育ての両立のみならず、育児休業制度の拡充のように父親の育児時間の確保を後押しするものも強化されてきている。このような支援の流れは、従来より一般的とされてきた性別による役割分担ではなく、人として自由にライフキャリアを選択することの推進にもつながる。

しかし父親の育児休業取得率は2022年に17%を超え過去最高となったものの（厚生労働省、2023b）、2025年度までに50%という政府が掲げる目標値までは大きな開きがある。父親が育児休業を取得しない理由としては、収入減少への懸念（39.9%）、取得しづらい職場の雰囲気（22.5%）、自分にしかできない仕事がある（22.0%）、会社で育児休業制度が整備されていない（21.9%）となっており、まだまだ職場環境が追い付いていない状況がうかがえる（厚生労働省、2023a）。

また、ユニセフの調査（2021）によると、先進国41か国のうち日本の育児休業制度について、父親に認められている育児休業期間が世界で最も長いことから、制度そのものの評価は1位を獲得している。しかし取得率の低さは課題とされ、その背景として、育児は母親の仕事であるという文化やジェンダーに関する社会通念があることも指摘されている。

つまり制度が拡充されても、取得に向けた運用面での環境整備や当事者を含めた社会の考え方などが追い付いていないのが現状といえよう。

本調査パート2においても、「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては夫と妻が同等にするほうがよい」「夫の収入にかかわらず、妻も夫と同等に仕事をするほうがよい」という男女同等な役割観を「よいと思う（「よいと思うし、そうしたい」と「よいと思うが、そうするのは難しい」の合計）」とする割合が、母親・父親ともにそれぞれ7割を超えるという結果になった（図2-1-1より一部抜粋）。しかし、そういった男女同等な役割観を「よいと思う」と支持しながらも、実際は「そうするのは難しい」とする回答は母親・父親ともに4割を超えており、価値観と現実との乖離が大きいことがうかがえる（本稿では「夫」を「父親」、「妻」を「母親」と表記する）。

図2-1-1 性別役割観(父母別) 抜粋



本調査では子育て当事者のさまざまな価値観を調査しているが、ここでは「父親の育児休業」について「よいと思うし、そうしたい」と積極的に肯定した父親と、「よいと思うが、そうするのは難しい」と消極的に肯定した父親が、家事・子育てに関する役割観についてどのように考えているかを比較し、父親の育児休業の取得に消極的な人の価値観の傾向を探っていきたい。

父親の育児休業について「よいと思うし、そうしたい」と回答した父親を「父親育休：積極・肯定群」とし、「よいと思うが、そうするのは難しい」と回答した父親を「父親育休：消極・肯定群」として、家事・子育てに関する伝統的な性別役割観、および男女同等な役割観への肯定度を比較した。

【比較属性】

「夫も育児休業をとるほうがよい」（父親の育休取得への肯定度）について

「よいと思うし、そうしたい」と回答した父親（1,077人・37.3%）：父親育休 積極・肯定群

「よいと思うが、そうするのは難しい」と回答した父親（1,218人・42.1%）：父親育休 消極・肯定群

【対象とした家事・子育ての役割観に関する項目】

「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては、妻がメインとするほうがよい」：伝統的な性別役割観

「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては、夫と妻が同等にするほうがよい」：男女同等な役割観

結果は、**父親育休に対する消極・肯定群**は、積極・肯定群と比較すると以下の通りである。

- 「家事・子育ては母親メインで」という**伝統的な性別役割観**を、**強く否定する割合が少なく、弱くも肯定する割合が多い。**

「よいと思わないし、そうしたくない」（消極・肯定群／積極・肯定群の順で、13.9%／37.3%）、  
「よいと思うが、そうするのは難しい」（消極／積極の順で、37.5%／18.3%）（図2-a上）

- 「家事・子育ては夫婦同等に」という**男女同等な役割観**を、**強く肯定する割合が圧倒的に少ない。**

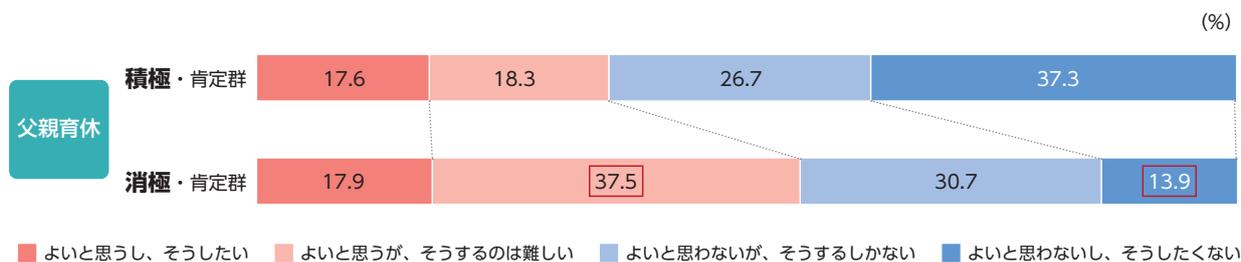
「よいと思うし、そうしたい」（消極／積極の順で、26.8%／56.8%）（図2-a下）

ここから、父親の育児休業取得を難しいと感じる背景には、家事・子育てについての父親自身の価値観も関係していることが示唆される。

図2-a 父親の性別役割観への肯定度

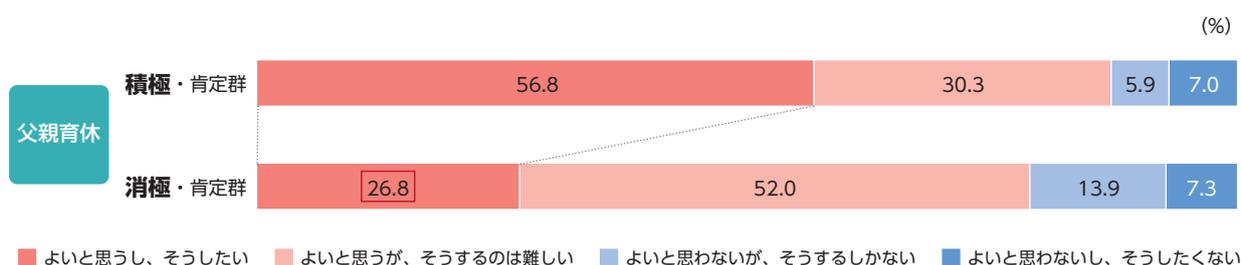
伝統的な価値観：家事・子育ては母親メインで

【父親回答】父親育休への肯定度 × 「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては妻がメインとするほうがよい」



男女同等な価値観：家事・子育ては夫婦同等に

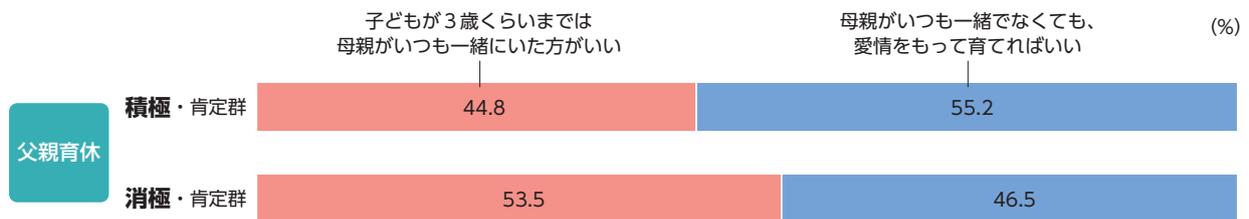
【父親回答】父親育休への肯定度 × 「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては夫と妻が同等にするほうがよい」



家事・子育ての分担については、いわゆる「3歳児神話」との重なりが考えられる。3歳児神話とは、「子どもが小さいうちは、とくに3歳までは母親が子どものそばにいて、育児に専念すべきだという考え方（大日向，2015，72p）」「子どもは3歳までは、常時家庭において母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼすという考え方（松本・永田ほか著，2017，26p）」であるが、日本はこの3歳児神話への支持が世界的にも高いことが国際比較調査から明らかにされている（内閣府，2007）。本調査における3歳児神話の項目においても、父親全体の約半数が支持する結果であり（パート2-3）、父親の育児休業の肯定度合いとクロス集計したところ、弱い肯定群は強い肯定群よりも3歳児神話を支持する割合が多かった（図2-b）。

図2-b 父親の「3歳児神話」への支持

【父親回答】 父親育児への肯定度 × 「3歳児神話」への支持



子どもの発達において、乳幼児期に安全な環境において愛情をもって養育されることの重要性はさまざまな研究により検証されているが、その時期に母親が育児に専念しないと子どもの発達がゆがむことはないことも検証されている（菅原，2001）。3歳児神話については、厚生労働省（1998）が「戦後の高度成長期を通じ男女の役割分業が確立していく過程で、欧米における子どもの発達に関して母子関係を重視する研究の影響なども受け（中略）「母性」の役割の重要性が強調された」（p.57）「3歳児神話には少なくとも合理的な根拠は認められない」（p.59）と発信しており、3歳児神話は1960、1970年代に高度経済成長期に男性の長時間労働とそれを支える専業主婦を必要とした産業形態の中で作られたものであると指摘されている。

しかし、上述の通り本調査でも育児の当事者である父親の約半数が3歳児神話を支持する結果となり、そういった価値観が父親の育児休業取得の難しさとも関連していることが示唆された。

もちろん母親が自らの意思で育児に専念することを選んだり、父親が自らの意思で仕事を選ぶことは個人の自由である。ただ、キャリアの選択に窮屈な思いを感じているとしたら、合理的なエビデンスがないとされているにもかかわらず「3歳児神話」にとらわれていないか、性別役割分担の社会的通念に流されているのではないかと自分の価値観を振り返ってみてはどうだろうか。子育てを支援する制度や環境整備のさらなる充実を期待しつつ、それらを十分に活用するためには一人ひとりが柔軟な考えをもつことも必要なのではないか。

父親の育児休業取得を難しくさせている価値観はほかにも考え得る。今後は、父親の価値観だけでなく、母親の3歳児神話への支持や、「仕事は父親がメインで」という性別役割観との関連、また3歳児神話の価値観形成にはどのような環境が影響するのかなど、さらなる検討を重ねていきたい。

## 【引用文献】

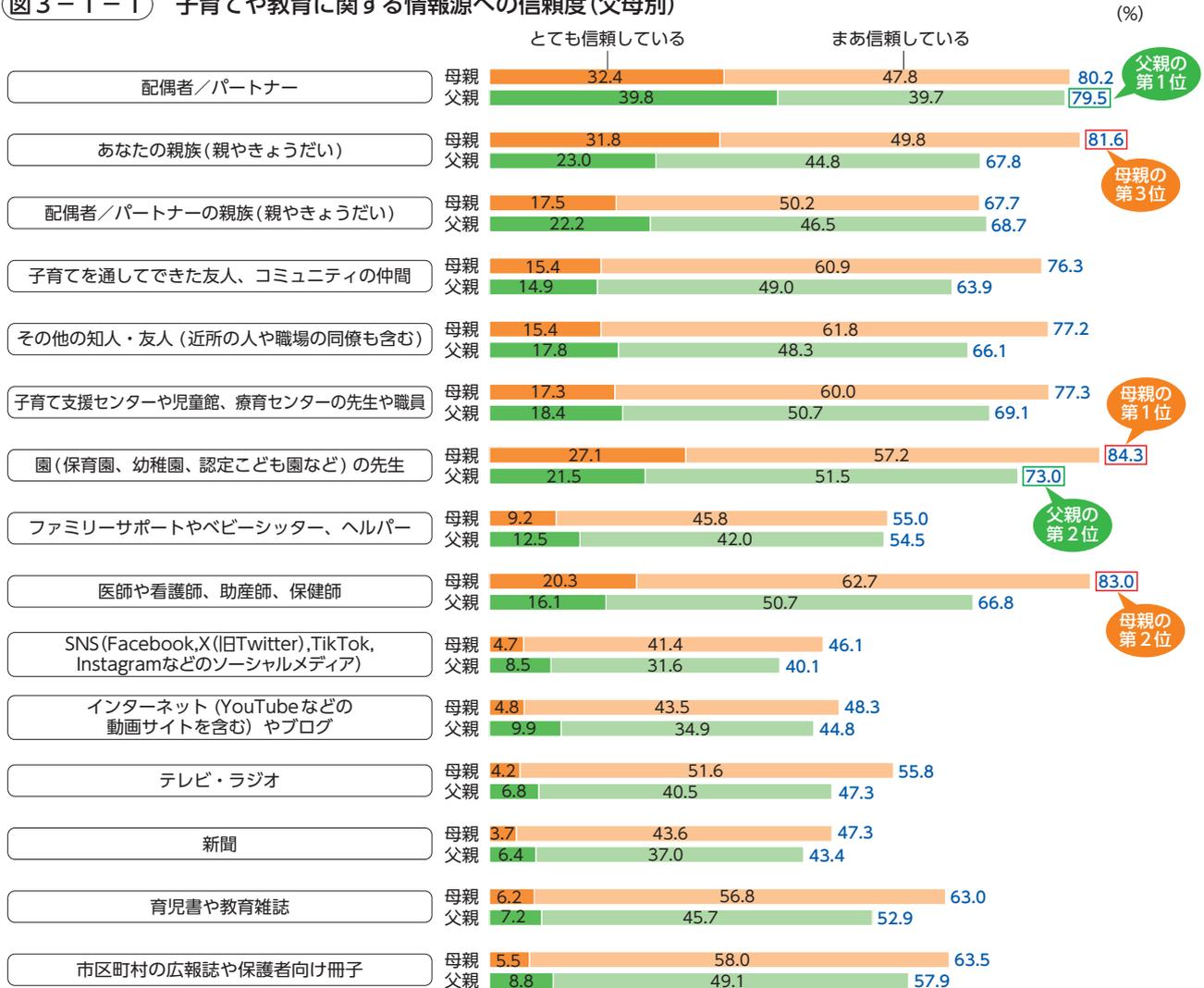
- 厚生労働省 (1998). 厚生白書 (平成 10 年版) Retrieved December 13, 2023 from [https://www.mhlw.go.jp/toukei\\_hakusho/hakusho/kousei/1998/dl/04.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1998/dl/04.pdf)
- 厚生労働省 (2023a). 令和 4 年度 仕事と育児の両立等に関する実態把握のための調査研究事業 Retrieved December 13, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/001085270.pdf>
- 厚生労働省 (2023b). 令和 4 年度雇用均等基本調査 Retrieved December 26, 2023 from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-r04/07.pdf>
- 松本 園子・永田 陽子・福川 須美・堀口 美智子 (2017). 実践 家庭支援論 [第 3 版] ななみ書房
- 内閣府 (2007). 平成 17 年度 少子化社会に関する国際意識調査 Retrieved December 26, 2023 from <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/cyousa17/kokusai/pdf/ishikizukai.pdf>
- 大日向 雅美 (2015). 増補 母性愛神話の罫 日本評論社
- 菅原 ますみ (2001). 3 歳児神話を検証する II ～育児の現場から～ 第 1 回日本赤ちゃん学会学術集会報告 Retrieved December 26, 2023 from <https://www2.jsbs.gr.jp/SCIENCE/SUGAWARA/index.html>
- ユニセフ (2021). 先進国の子育て支援の現状 Retrieved December 26, 2023 from <https://www.unicef.or.jp/news/2021/0127.html>

## 3-1 子育てや教育に関する情報源への信頼度

保護者はさまざまな情報源から子育てや教育に関する情報を収集しているが、どのような情報に信頼を寄せているのだろうか。家族や知人といった「人」や、インターネット・SNSなどの「メディア」についてたずねた。

**Q** お子さまの子育てや教育について、次の人やメディアから得る情報をどの程度信頼していますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

図3-1-1 子育てや教育に関する情報源への信頼度(父母別)



## Point

父母ともに子育てや教育について「配偶者／パートナー」と「園の先生」から得る情報への信頼が高い。

子育てや教育に関する情報源として、母親は「園(保育園、幼稚園、認定こども園など)の先生」「医師や看護師、助産師、保健師」「自分の親族(親やきょうだい)」「配偶者／パートナー」の順に信頼が高く、「とても信頼している」「まあ信頼している」をあわせて8割以上となった。一方、父親は母親ほど各情報源に対する信頼が高くない傾向があるが、「とても信頼している」「まあ信頼している」をあわせて7割以上となったのは「配偶者／パートナー」「園(保育園、幼稚園、認定こども園など)の先生」であった。

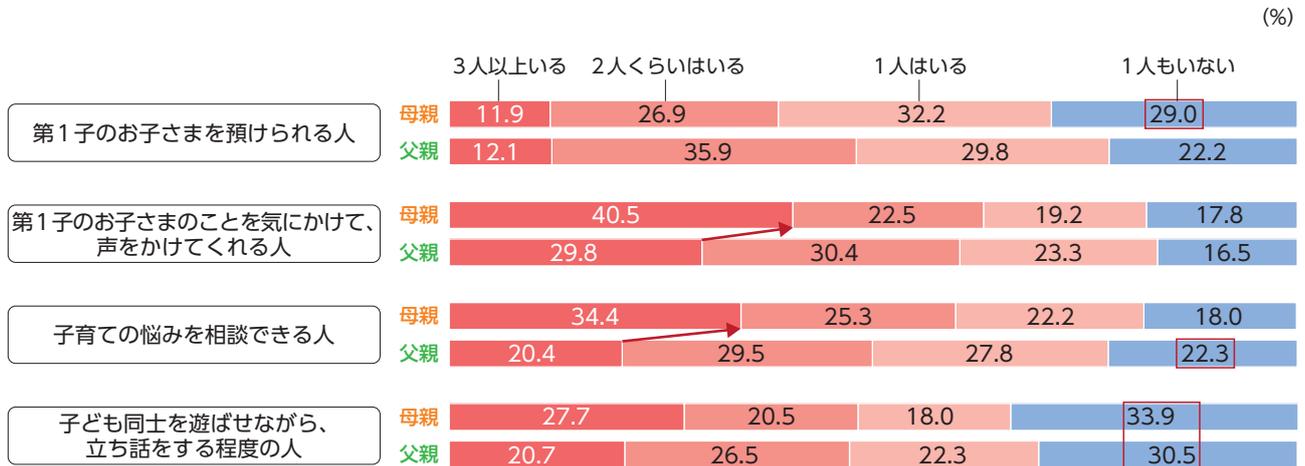
全体的に、SNSやインターネットなどの「メディア」よりも、子育てを介して関わる身近な「人」からの情報への信頼度が高い傾向がみられる。

## 3-2 地域における子どもを通じた付き合い

母親や父親は子育てを行うなかで、ソーシャルサポート(社会的支援)をどの程度得られているのだろうか。また、そのような支援を得られることと主観的な幸福感には関わりがあるのだろうか。地域における子どもを通じた付き合いの種類とその人数についてたずねるとともに、母親について主観的な幸福感との関係性をみた。

**Q** 地域の中で、第1子のお子さまを通じたお付き合いについてお伺いします。  
各項目について、それぞれあてはまるものを選択してください。

図3-2-1 地域における子どもを通じた付き合い(父母別)



**Q** 毎日の生活の中で、あなたがどのように感じているかを伺います。  
「ここ数年やってきたことを全体的に見てどの程度幸せを感じるか」

図3-2-2 地域における子どもを通じた付き合いと「主観的幸福感」(母親)



※「とても幸せ」「まあまあ幸せ」「あまり幸せでない」「全く幸せでない」のうち、「とても幸せ」、「まあまあ幸せ」の%。( )内は人数。  
※主観的幸福感の設問は、伊藤・相良・池田・川浦(2003)主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究 74(3), 276-281. より許可を得て使用。

## Point

約3割の母親が「地域の中で子どもを預けられる人」が1人もいない。

母親の約3割(29.0%)が地域において「子どもを預けられる人」が「1人もいない」と回答した(図3-2-1)。また、父親は「子育ての悩みを相談できる人」が「1人もいない」と答えた割合は22.3%で、母親(18.0%)に比べて高かった。

一方、母親が地域の中で「3人以上いる」と回答した割合が父親に比べて10ポイント以上高かったのは「子どもを気にかけて声をかけてくれる人」(40.5%)、「子育ての悩みを相談できる人」(34.4%)であった(図3-2-1)。

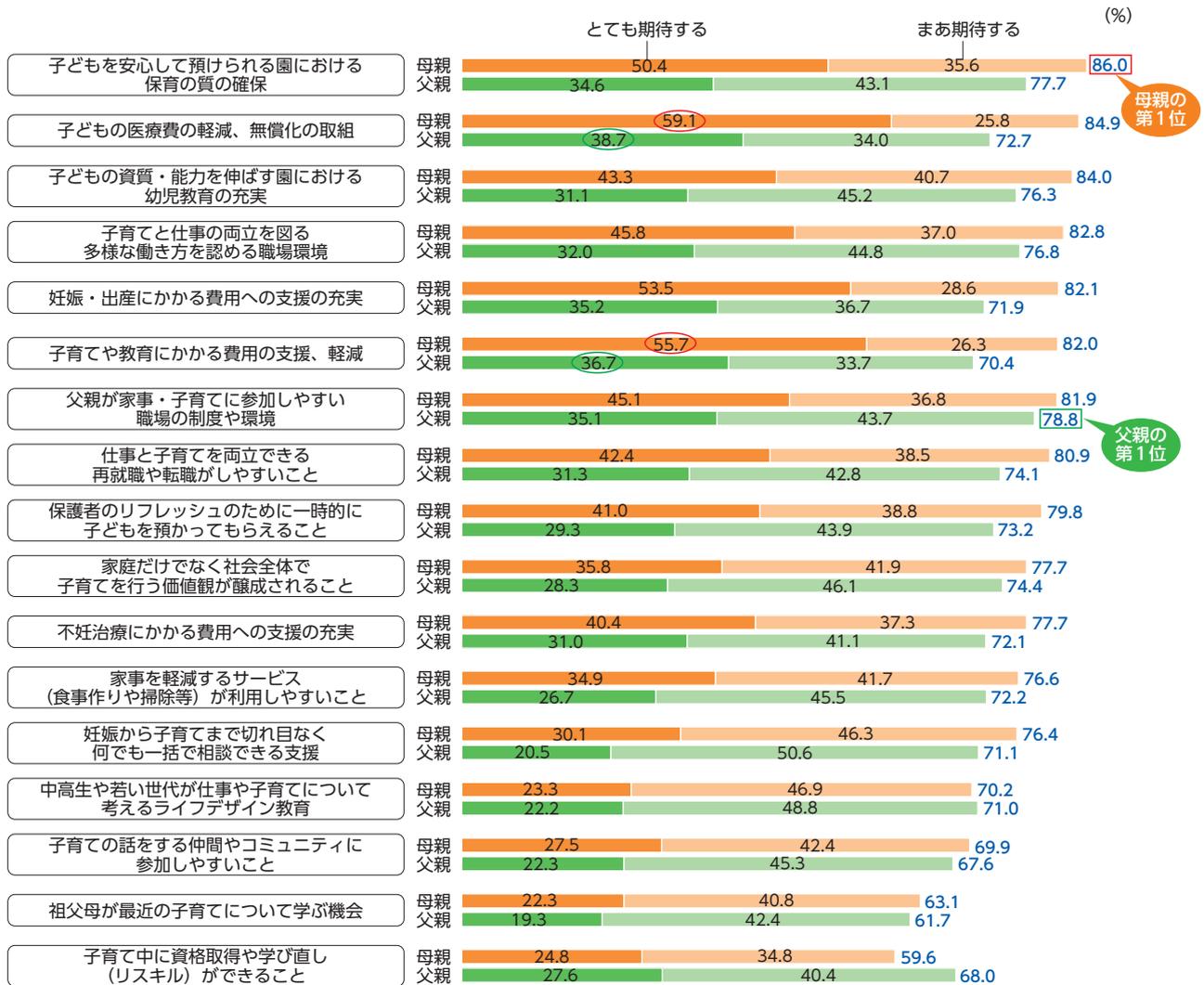
なお、母親が地域において、子育てについて声をかけてくれる人や悩みを相談できる人が多いことと「主観的幸福感」の高さに関わりがみられる(図3-2-2)ことから、地域で子育てについて気軽に話せる人の存在が母親の主観的幸福感に寄与している可能性が考えられる。

## 3-3 妊娠・出産・子育てに関する支援・環境整備への期待

父母の子育てや仕事との両立に関する悩みを解決するためには、どのような支援が必要なのだろうか。妊娠・出産・子育てに関して、父母が期待する経済的な支援や環境整備への期待を具体的に示して確認した。

**Q** あなたは、妊娠・出産・子育てにあたって、どのような支援や環境整備があることを期待しますか。それぞれあてはまるものを選択してください。

図3-3-1 妊娠・出産・子育てに関する支援・環境整備への期待(父母別)



※ 「とても期待する」「まあ期待する」「あまり期待しない」「まったく期待しない」のうち、「とても期待する」「まあ期待する」の結果を母親の降順で図示。

## Point

子育てに関する経済的な支援に加えて、「子どもを安心して預けられる園における保育の質の確保」(母親)、「父親が家事・子育てに参加しやすい職場の制度や環境」(父親)への期待が大きい。

妊娠・出産・子育て支援への期待「とても期待する+まあ期待する」として、母親の第1位は「子どもを安心して預けられる園における保育の質の確保(86.0%)」、父親の第1位は「父親が家事・子育てに参加しやすい職場の制度や環境(78.8%)」であった。

なお、「とても期待する」に着目すると、母親・父親ともに第1位は「子どもの医療費の軽減、無償化の取組(母親59.1%、父親38.7%)」、第2位は「子育てや教育にかかる費用の支援、軽減(母親55.7%、父親36.7%)」と、経済的な支援・軽減への期待が大きい。

## 情報への信頼や子育て支援への期待にみる 「親」になる入口からの支援の重要性

ベネッセ教育総合研究所 杉田 美穂

パート3では、妊娠・出産・子育て期の父母がどのような情報源を信頼し、支援や環境整備を期待しているかが明らかになった。本稿では、父母のライフキャリアや就業形態による違いについて追加分析を加えて考察していく。

2022年に行われた「第6回幼児の生活アンケート」（ベネッセ教育総合研究所）では、しつけや教育に関する情報源として、母親の友人・知人や祖父母が減りSNSが増えていることが示された。コロナ禍の影響もあり身近な人からよりもSNSから得る情報の存在感が増す状況がみられたが、保護者はそれらの情報をどの程度信頼しているのだろうか。

本調査では子育てや教育についての情報源をどの程度信頼するかをたずねたところ、父母ともにSNSやインターネットといった「メディア」よりも、園の先生や医師、配偶者、親族といった「人」に、より信頼を寄せていることがわかった（図3-1-1）。これらの結果から言えることは、情報を得る手段としてはSNSが増えているが、信頼するのは身近な人から得る情報であるということであろう。また、地域における子どもを通じた付き合いでは、声をかけてくれたり子育ての悩みを相談できたりする人が多いことと、母親の主観的幸福感の高さに関わりがあることも明らかになった（図3-2-2）。このようなことから、お互いが顔の見える関係であることと情報への信頼度には関わりがあり、子どもを通じた地域の付き合いがあることが母親の主観的幸福感につながる可能性が示されたと言える。

次に、妊娠・出産・子育てに関する支援・環境整備への期待をみていきたい。内閣府の調査（2020）によると、妊娠・出産・育児期の支援として経済的負担の軽減への期待が高いことが示されている。本調査においても父母ともに妊娠・出産・子育てに関する経済的支援への期待は高いことが示されたが、経済的支援に関わる項目と同様に、保育の質の確保や幼児教育の充実といった園の環境や、多様な働き方が認められ、父親が家事や子育てに参加しやすい職場環境への期待も高いことが明らかになった。今後は男女ともに育児と仕事を両立することが主流になっていくと考え、子どもを安心して預けられる園の環境や、妊娠・出産・子育てに理解のある職場が一層求められていくであろう。

最後に、子どもの年齢別にみていくと、母親（図3-a）や父親（図3-b）のように、総じて子どもの年齢が低いほどさまざまな支援や環境整備への期待が高く、特に「0歳」が全体と比べて高いことがわかった。

図3-a

【母親】「子どもを安心して預けられる園における保育の質の確保」への期待×子どもの年齢

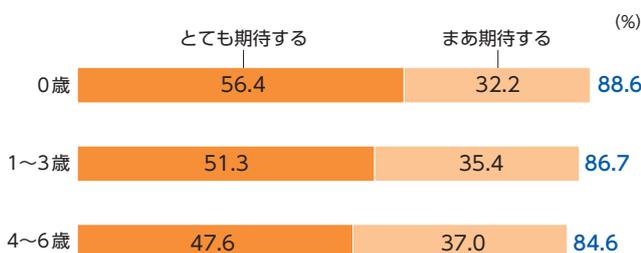


図3-b

【父親】「父親が家事・子育てに参加しやすい職場の制度や環境」への期待×子どもの年齢



そして、母親の就業形態別（正規、非正規、自営、休職、無職の5区分）にみると、情報源への信頼度について、休職中（産育休・病気療養等）の母親は、15項目のうち10項目で「とても信頼している+まあ信頼している」が母親全体の平均より5ポイント以上高い結果となった（表3-cに差が大きい上位3つを記載）。また、支援・環境整備への期待については、正規職、非正規職、無職の違いによる傾向に大きな差はなかったが、ここでも休職中の母親について、17項目のうち14項目で「とても期待する+まあ期待する」が母親全体の平均より5ポイント以上高い結果となった（表3-dに差が大きい上位3つを記載）。今回の調査の対象は第1子であるため、休職中の母親は妊娠・出産によって初めて「親」の役割を担っている。そして復職後に再び「職業人」の役割を担うことに備え、さまざまな人やメディアからの子育てや教育に関わる情報を信頼し、仕事と子育てを両立できる支援を強く求めている姿が浮かび上がってこないだろうか。

表3-c 【母親】子育てや教育に関する情報源への信頼度（「とても信頼している+まあ信頼している」について「休職中の母親」が「母親全体」のポイント差が大きい上位3項目

		(%)		
		母親全体	休職中の母親	差
1位	育児書や教育雑誌	63.0	75.7	+ 12.7
2位	市区町村の広報誌や保護者向け冊子	63.5	74.1	+ 10.6
3位	医師や看護師、助産師、保健師	83.0	92.4	+ 9.4

表3-d 【母親】妊娠・出産・子育てに関する支援・環境整備への期待（とても期待する+まあ期待する）について「休職中の母親」と「母親全体」のポイント差が大きい上位3項目

		(%)		
		母親全体	休職中の母親	差
1位	不妊治療にかかる費用への支援の充実	77.7	87.2	+ 9.5
2位	妊娠・出産にかかる費用への支援の充実	82.1	91.3	+ 9.2
3位	父親が家事・子育てに参加しやすい職場の制度や環境	81.9	90.8	+ 8.9

このように、子どもが小さく特に0歳の子どもをもつ父母からの子育て支援への期待が高い結果から、第1子の妊娠・出産といったライフキャリアの大きな変動期にある父母への支援が特に大切であると言える。そして、支援内容については、経済的な援助だけではなく安心して子どもを預けられる園の環境や子育てに対する職場の理解が重要である。

新しく親になる（なった）父母が、それぞれに望むあり方で「親」「家庭人」「職業人」「個人」の役割を果たせるよう、親になる入口から重点的に、子育てや教育に関わる情報および経済的・環境的な援助によって支えていくことが一層望まれる。

#### 【参考文献】

- ベネッセ教育総合研究所 (2022). 第6回幼児の生活アンケート Retrieved January 5, 2024 from <https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=5803>
- 内閣府 (2020). 少子化社会に関する国際意識調査 Retrieved January 5, 2024 from [https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf\\_index.html](https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/13024511/www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/r02/kokusai/pdf_index.html)

# 調査からみえてきたこと

## ベネッセ教育総合研究所

出産によって、夫と妻には新たに「親」という役割が増える。第1子として乳幼児を育てるライフステージにある父母は、どのようにライフキャリアを考えているのだろうか。そして、その背景にはどのような性別役割分業意識があり、支援ニーズをもっているのだろうか。

パート1では、子育て時期の主要な役割として、親、家庭人、職業人、個人を取り上げ、どの役割にどの程度重みをおいているかに着目し、父母別の比較を行った。結果、乳幼児を育てる父母ともに①親役割にもっとも重みをおいていること、②母親は「親」や「家庭人」としての役割を、父親は「職業人」としての役割を現状よりも減らしたいと考えていること、③子育てや家事の分担比率や時間は、父親よりも母親のほうが多いこと、がわかった。この傾向は先行調査と同様であり、2020年代においても「親」と「家庭人」としての役割は主に母親に委ねられている現状が改めて確認された。一方で、父母ともに「個人役割」への配分は低めであり、現状より増やしたいと考えられていた。そして、その結果と対応するように、父母ともに悩みの第1位は「自分のための自由な時間を確保するのが難しい」であった。子育て世代は多重役割を避けられず、父母ともに自分の時間を確保できないと思うほどの負担を感じている。こういった子育て世代の負担を、当事者である親だけで何とかするのはもはや難しいということを経験している人は、子育てや働き方に関する社会問題は解決できないのではないかと懸念している。

パート2では、性別役割観、子育てと自分の生き方、3歳児神話、子育ての肯定的・否定的感情等のさまざまな価値観や意識を調べた。「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては、夫と妻が同等にするほうがよい」という家庭役割の平等について、父母の約8割が賛成しながらも、賛成者の半分以上は実際には難しいと答えていた。これは、パート1でみた子育てや家事を主に担うのが母親であるという現状からも、実際の難しさやうかがえる結果であった。このような子育て観や仕事観、男女の役割観に影響を与えている人や環境をきいたところ、父母ともに配偶者／パートナーと自分の親の影響がもっとも大きい。約5割の母親が世の中の風潮や常識と回答したことに着目したい。一緒に暮らす人の考えや被養育体験に加えて、風潮や常識といった目に見えない「こうあるべきという空気」が影響を与えているということである。子育てをしながらどのようなライフキャリアを築くかは、当事者である母親と父親の価値観や意識だけでなく、彼らを取り巻く人々や社会全体も大きな影響をもっている。つまり、母親と父親のライフキャリアの悩みや苦しみを解決するには、社会を構成する私たち一人ひとりの価値観や意識も変えていく必要があるといえるのではないだろうか。

パート3では、子育てや教育についての情報源への信頼、地域での子どもを通じた付き合い、妊娠・出産・子育てに関する支援・環境整備への期待をたずねた。2020年からのコロナ禍の影響で、対面でのふれあいは大きく減少し、制限された。そのような環境で、乳幼児を育てる父母は、園の先生（母親1位・父親2位）や、医師などの専門家（母親2位）、配偶者／パートナー（父親1位）等、制限された中でもあって相談できるような人への信頼が高いことがわかった。父母で相談したり、やりとりのできる専門家を信頼したりしていることがうかがえる。また、母親では地域で子どものことを気にかけて声をかけてくれたり、悩みを相談できたりする人が多いほうが、主観的幸福感が高いこともわかった。今後、「こどもまんなか社会」を目指す中で、子育てをしている人を応援する周囲のシステムが重要であることがわかる。支援ニーズについて、母親は「子どもを安心して預けられる園における保育の質の確保」、父親は「父親が家事・子育てに参加しやすい職場の制度や環境」が第1位だった。政府が進める「こども未来戦略方針」では、仕事の有無に関わらず子どもを預けられる施策が打ち出されているが、子どもを信頼して預けられるような保育の充実が求められている。また、父親は家事・育児への参画意識は高くても実際には難しい理由として職場の制度や環境があることを訴えているが、パート2では母親よりも父親に3歳児神話を信じる傾向が強いことも示された。これらのことから、制度や環境整備といった社会的側面だけでなく、当事者を含む個人の意識的側面も求められていると言える。そして、その変化が速やかに進むことは現役の父母のみならず、今後、親になる人々に対しても必要なことと思われる。

最後に、本調査の課題を2点あげる。1点目は、本調査のデータは夫婦ペアではないことである。夫婦ペアデータであれば、夫婦間の意識の違い等の分析の幅がより広がり、クロスオーバー等の分析も可能になる。2点目は、本調査は横断調査のため、因果関係をみることはできない。父母のライフキャリアの役割意識の配分も、子どもをもつ前後から回答時に至るまで変容する可能性が想定されるが、プロセス的な変化を調べるには、縦断的な調査や質的研究が必要である。

白百合女子大学 大野 祥子

この調査は乳幼児の保護者を対象に、「子どもの親」という立場だけでなくライフキャリア全般についての意識と実態、ニーズを把握しようとしたものです。ライフキャリア=生活や人生はジェンダーと関わりが深いですが、ジェンダーに関する意識は「理想／現実」「一般論／自分のこと」など多層的であることが知られています。今回の調査結果にもそれが表れていたと思います。

「妻の就業の有無にかかわらず、家事・子育ては、夫と妻が同等にするほうがよい」という考え方に父母ともに8割程度が賛同していることから、価値観の上では、就業条件とは関係なく家事や子育ては夫婦で同等に行いたいという希望が浸透していることがわかります。4つの役割の重みづけをみても、無職の母親だけでなく有職の母親や父親でも「親」や「家庭人」といった家庭役割の比重が高いのは、子育てや家庭生活に関心を向け、大切に考えていることを示しているでしょう。しかし理想と現実にはギャップがあり、家事や子育ての分担率などの現実には依然として性別役割分業的な偏りが大きいことがみられました。父親の分担率は少なめであるにも関わらず、家庭役割の重みづけは高く、満足している人が多いことから、父親にとって「親」や「家庭人」という役割は「家事・育児行為を実際に行うこと」とイコールではないようです。図2-1-1に見られるように男性に稼ぎ手役割が期待されている中では、「家庭が大切」と思っても実際に家事・育児を行うことは難しいのかもしれませんが。

家事や育児には物理的に身体を動かす行為を要する時間消費的な側面があります。家事や子育ての多くを分担する母親たちは、家庭役割の最終ラインを守る責任を果たすために多くの時間を割いています。父親と比べて母親のほうが、自分のための時間の確保やキャリアアップの難しさに悩み、子育てだけでなく自分の生き方を大切にしたいと希求するのはそのためだと考えられます。今回のレポートは父母の対比が中心ですが、家庭役割の物理的な負担のために理想のライフキャリアの実現が難しいという悩みは母親だけのものではなく、家事・育児の分担率の高い父親やひとり親の父親などにも共通するのではないのでしょうか。保護者たちは、子育て費用面での支援と並んで、子育てと仕事の両立を支える制度や環境の保障を期待しています。家庭役割の責任を負うことが仕事や社会的活動のハンディにならない環境の整備は喫緊の社会的課題でしょう。

保護者たちの価値観は、配偶者／パートナーや双方の親など身近な家族・親族からの影響を強く受けており、知人・友人の影響はそれほど強くないという結果でした。身内を頼りにするか、さもなければ公的な制度に期待するか、その中間にあたるコミュニティのつながりが相対的に弱いようです。身近な家族・親族に次いで影響を受けているのが「世の中の風潮や常識」である点が目を引きます。「子育ては、親や家族の責任で行うべき」とする「親の自己責任論」や母性神話、長時間労働をよしとする風潮などの抽象的な空気が保護者たちにプレッシャーを与えているのかもしれませんが。人類の子育ては、保護者以外にも多くの人に関わるアロペアレンティング（共同養育）が進化的にみて理にかなっているといわれます。保護者をサポートする制度の拡充だけでなく、子育ての当事者ではない人々の関心を高め、世の中の“空気”が子育てに対してあたたかいものになるような支援策が求められるでしょう。

## 調査からみえてきたこと

白梅学園大学 福丸 由佳

家庭生活や職業生活、地域社会との関わり、個人の活動など、人生にわたって私たちが担った経験したりする営みを広くとらえる「ライフキャリア」の視点は、人生100年時代の現在、高齢期までの長きにわたる大きなテーマといえるでしょう。その中であって乳幼児を育てる時期は、ごく初期の段階にも関わらず、子どもが誕生し親役割が生じることでさまざまな選択を迫られたり、家庭や職場、社会の中でのバランスをとったりすることが求められます。初心者マークをつけながらも、初めて走る曲がりくねった山道をかなりのスピードとハンドルさばきで運転することが求められる…そんな時期といってもいいかもしれません。

さらに、今回の調査対象者の特徴は、コロナ感染症というこれまでにない大変な状況下での妊娠や出産、子育てを経験されているということです。その中で、8割以上の父親・母親が「子どもがかわいくてたまらない」「子育ては楽しくて幸せ」（よくある+時々ある）と感じていることにもしっかり目を向けたいと思います。

一方、約2割の母親が、ママ友やコミュニティの友人がいない、3割近くが地域の中で子どもを預けられる人が一人もいないという状況も示されています。また、子育てや仕事などに対する価値観は、パートナーとの関係も大きいと同時に、世の中の風潮や常識といったもの、つまりなんとなく感じる世間の目、メッセージの影響が決して小さくないようです。親同士がつながったり誰かを頼ったりということが必ずしも容易でない中で、子育て世代の方々に対して向けられるあたたかなまなざしや柔軟な視点といったものが、社会全体に求められていることを改めて実感させられる結果です。

さらに、今回の調査に協力してくださった父親の半数以上が、配偶者／パートナーが正社員・正職員という状況のようです。ライフキャリアは、家庭生活のありようやパートナーとの関係という視点からも、興味深いテーマであることを示しているのではないのでしょうか。同時に、割合は高くありませんが、パートナーがいない中での子育てを担っておられるの方々に対しても、ライフキャリアという視点から、その状況や課題、大切なサポートなどについて検討していく必要もあるでしょう。

くり返しになりますが、ライフキャリアは、男女はもちろん、子育てや仕事の有無などに関わらず、どのような状況の人にも関わってきます。子育てに唯一の正解がないのと同様、ライフキャリアの道筋そのものもさまざまです。また、乳幼児を育てる「今」の時期だけに決定づけられるものではなく、子どもの成長やそれぞれの人生の移行と共に変化していくものでしょうし、初心者マークがとれた後も、家庭や地域、職場、そして社会の状況などに影響されながら、模索していくものといってもいいでしょう。長いスパンの中でライフキャリアをとらえる視点が親自身にとっても大切であると同時に、そういう気持ちになれること、柔軟で多様な選択肢を模索できる社会であるためにも、さまざまな世代の存在やお互いの交流が改めて大切であるといえるのではないのでしょうか。

## 調査企画・分析メンバー

### ● 協力

福丸 由佳 白梅学園大学 教授

大野 祥子 白百合女子大学 非常勤講師

### ● 分析

佐藤 昭宏 ベネッセ教育総合研究所 学習科学研究室 室長

持田 聖子 ベネッセ教育総合研究所 主任研究員

森永 純子 ベネッセ教育総合研究所 主任研究員

杉田 美穂 ベネッセ教育総合研究所 主任研究員

※所属・肩書は、2024年3月時点のものです。

本調査報告書は、  
ベネッセ教育総合研究所のホームページからダウンロードできます

ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果も、こちらからご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所

検索

<https://berd.benesse.jp/>

引用・転載についてはこちらをご確認ください。

<https://berd.benesse.jp/application/>

## 乳幼児の保護者のライフキャリアと子育てに関する調査報告書

発行日：2024年4月1日

発行人：野澤雄樹

編集人：佐藤昭宏

発行所：(株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

企画・制作：ベネッセ教育総合研究所

デザイン・編集協力：(株)縁

00T003

© Benesse Educational Research and Development Institute

※無断転載を禁じます